

Shall We Juggle?

日本ジャグリング協会オフィシャルマガジン

No.
66



JJF2024姫路特集

Japan Juggling Festival 2024

Shall We Juggle? No.66 目次

実行委員長コメント

予選講評・決勝講評

チャンピオンシップ入賞者コメント

ロゴデザイン紹介

ゲストインタビュー1：Arriu Lahtinen & Stina Otterström (OLO Company)

ゲストインタビュー2：深河あきら

ゲストインタビュー3：ジャグリング・ユニット・フラトレス

ワークショップ一覧

イベント紹介

SWJ編集部について

編集後記・奥付

巻頭言 「これがJJF」

JJF2024は、初めて姫路での開催となりました。東京以外での正式開催は7年ぶり、兵庫県での開催はJJF2008以来16年ぶり2度目となります。オリンピックセンター以外でのJJFを初めて経験した方もいたかと思われます。

残暑厳しく太陽の日差しが燦々と照りつける中、国内外から参加者が集結し、文字通り熱気に包まれていました。会場となったアクリエひめじは、天井10メートルの展示場、大中小3つのホールに会議室と屋外の練習場所もあり、ホールと練習場所が目と鼻の先の距離、カフェの名前も「ファウンテン」など、まさにジャグラーやJJFのためにあるかのような会場でした。

2024年は特に、乳児からマスターズまで、幅広い年代の参加者がジャグリングを楽しんでいる様子が印象に残っています。また、新聞社の当日取材やキッチンカーの出店など、開催地とのつながりを意識した新たな試みも行われました。今号ではそんなJJF2024の魅力を余すことなくお伝えできればと思います。

そして、2024年度よりShall We Juggle? (SWJ) の編集長が交代しました。前編集長のクロ助さんを編集部員として迎え、2023年度より発足した新体制の編集部メンバーで引き続き活動していきます。

今回編集長になるにあたり、過去に発行されたSWJを読み返してみると、これまで数えきれないほど多くの方がSWJに携わっていたことや、ジャグリングが長年愛されてきたことを改めて感じ、身が引き締まる思いです。(初代編集長の青野さんが、自分の大大先輩であることも分かりました！)

66号まで続いてきたSWJをこれからも残していけるように頑張っていきますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

——初めての巻頭言、上手く書けていますでしょうか？
SWJ編集長 まゆこ





JJF2024姫路特集



Japan Juggling Festival 2024(JJF2024) 開催概要

開催日時：2024年9月14日(土)～16日(月) 会 場：アクリエひめじ
 主 催：NPO法人 日本ジャグリング協会 後 援：姫路市
 協 賛：cafe moani、井上 淳也、toro bagel、FIELD CAFE with espresso、NPO法人関西パフォーマー協会、
 三珠さくまる@ジャグリングvtuber、Nagotsuki Farm、南大沢ジャグラーズミーティングプレイス、劇団ほのぼののーの、
 渡邊 翼、鏡のパズルドラミラド、暮井 透、PM Juggling、糟啓堂ジャグリング教室、松岡 寿典、jugmap、
 土居 千夏、花田 充、その他匿名希望者

JJF2024 実行委員長コメント クロ助

お疲れ様です。JJF2024 実行委員長を務めさせていただきましたクロ助です。この度はSWJで実行委員長コメントを掲載して頂けるということなので、せっかくの機会ですので私がJJF開催に向けて考えていたことや、皆様の目に触れることの無い運営の裏側に関する話などを紹介できればと思います。

まず、私がJJF2024 実行委員長になった経緯についてお話させていただきます。元々、私は日本ジャグリング協会関係として、事務局長とSWJ編集部員の肩書を持っていました。詳細は割愛しますが、ざっくり言うと協会の中の二つの部署に兼任で所属しているようなものとお考えください。そのため、これらに加えてJJF実行委員を務めるとなると、他の方々、特に若手の経験の機会を奪ってしまうのではないかと懸念があり、お声掛けいただいた当初は「他に適任者や希望者がいなければ引き受けます」という保留の回答をしていました。

(JJF2023の閉会式で実行委員長が公開されなかったのには、実はこのような事情がありました)

最終的には、皆さんご存じの通り実行委員長を拝命することとなり、多くの方に楽しんでもらえるJJFとなるよう尽力させていただきました。ご参加いただいた皆様にとっても楽しい思い出となっていけば幸いです。

ここからは、今回のJJF運営の話を、いくつか紹介させていただきます。

今回は広報関係で初めての試みをいくつか行いました。具体的には新聞記者が打診を行うことで、神戸新聞にJJF2024の記事を掲載していただきました。記事は開催前と開催後の二回掲載してもらえました。JJF中には実際に記者の方に取材に来てもらい、写真や動画、参加者へのインタビュー記事など現地の様子を上手く伝えていただけたと思います。

また、関西を中心に活動しているNPO法人関西パフォーマー協会様にご協力いただき、関西の大道芸やショーに興味がある層へのPRを行いました。ちなみに、JJF中にも関西パフォーマー協会様と連携したイベントも開催しておりました。

あくまで私個人の感覚ですがJJFはディープなジャグラー向けの内容となっているため、日本ジャグリング協会が掲げる理念でもある、“ジャグリングの認知度向上”という効果はやや弱いと感じていました。そのため、今まで情報に触れる機会がなかった方々に知ってもらえればと思い、これらのアクションを起こしました。

なお、誤解して欲しくないのは、現在のJJFのあり方に不満がある訳ではありません。あくまで、「こんな素晴らしいイベントなのに、それを知る層に限られるのはもったいない」という考えであることはご承知おきください。

協賛についても従来の実施事項を改良するかたちで力をいれました。協賛プランの見直しや会場内へのポスター掲示など、リターンの幅を増やすと共にチケットサイトを利用することで、より簡便にご支援いただける体制構築を行いました。また、キッチンカーへの協賛依頼を行い、ありがたいことに3店舗にご支援いただくことができました。キッチンカー店舗には協賛金に加えて、会場内での飲食販売もしていただけたので、JJF参加者の満足度向上にもつながったのではないかと思います。

但し、現状でご協賛いただいている方のほとんどは、ジャグリングやJJF自体に深い関係の深い方であり、今後のJJFの発展を考えるとジャグリング界以外から協賛していただける体制構築していくべきだと思っています。本件については今後も継続的に検討すべき課題だと思っています。

イベントを運営する以上、どうしても資金が必要となります。JJFの参加費用は高額であり、特に学生の方や遠方にお住いの方には負担が大きくなっており申し訳ないと思うのですが、何卒ご理解いただけますようお願い申し上げます。そんな中で協賛金というかたちで多くの方にご支援をいただいたのは本当にありがたい限りです。

運営体制や運営方法についても、自分なりにいくつかの改善を行いました。具体的には必要な会議の見直しによる会議時間の削減や各種業務の文書化による暗黙知の共有、作業ソールの改善による業務の効率化などです。但し、これらは全て上手くいったという訳ではなく、慣れないことをしたためにマイナスに働いてしまった面もあるので、一概に成果として誇れるものではないかもしれません。例えば、会議を減らすとコミュニケーションの機会が減ることになるので、必要な情報が上手く伝わっていなかったということもありました。もちろん、トータ

ルでは良い方向にできたと思っているのですが、運営業務の進め方については完全な正解がないので難しいところです。今後も精進していきたいと思います。

JJF実行委員については、毎年継続して参加するメンバーもいますが、実行委員長は毎年変わることが多いですし、毎年、新規メンバーも一定数は参加してくれます。そのため、業務の標準化とノウハウの引継ぎが重要となりますが、現状は通常業務が忙しく引継ぎや標準化資料の作成までは手が回りきっていないという印象を受けます。また、単純にJJF実行委員の業務には文書化に適さないものも多いことも原因だと感じます。どこまでできるかわかりませんが、少なくとも私がJJF実行委員に関わる間は、しっかりと技術継承をしていきたいと考えています。少し話は飛ぶのですが、JJF実行委員を含めて日本ジャグリング協会全体では業務量に対して運営人員が不足していると思っています。そして、人員に余裕が無いので運営メンバーの募集や教育に割くリソースが不足し、結果として人材が集まっていないという負のスパイラルになっていると感じます。そもそも、JJFは知っているが日本ジャグリング協会が何をしているのか良く知らないという人も多いのではないのでしょうか。実は、そのような現状の改善になればいいJJF中に「日本ジャグリング協会とは？」という協会の体制や活動内容を説明する座談会を開催してもらいました。今も資料はWebサイトに残っていると思いますので、もし興味があれば確認いただければと思います(注1)。そして、もし良ければJJF実行委員をはじめ、協会の運営に関わっていただけると嬉しいです。

最後となりましたが、今回、JJF実行委員長を務めさせていただき、改めてJJFは多くの方の支えにより成り立っている素晴らしいイベントだと感じました。CSGSステージでは舞台監督や劇場チーム、配信チームの皆様の力が、展示場ではイベントチームや本部チームの力が必要不可欠です。また、ここで名前を挙げた項目以外にもWebやSNS、各種申請の事務手続きなど、非常にたくさんの業務があり、当然ながらそれらに対応してくれた方がいるからこそ、今回のJJFを開催することができました。立场上、JJFを代表したような発言をすることもありますが、実際のイベント運営を担っているのは私ではなく実務を担当してくれる方々であることを、念押ししてお伝えしておきます。

また、上記の他にも当日スタッフやWS講師、ご協賛などのかたちでJJFにご協力いただいた方や、JJF開催にあたって色んなアドバイスをくれた有識者の方々のおかげでJJFは成り立っております。

改めて、運営に携わってくださった皆様、本当にありがとうございました。

今後について、少なくともJJF2025の年には実行委員として関わるつもりですので、引き続きJJFの成功に向けて尽力していく所存です。また、クビにならないけれどもう少しは事務局長を務めている気がするので、しばらくは何らかのかたちでJJFには関わっていると思います。

最後までお読みいただき、ありがとうございます。まだどこかのイベントでお会いすることがあればお気軽にお声掛け頂けると嬉しいです。それでは皆様、よいジャグリングライフを！



注1：日本ジャグリング協会とは？（事務局から見た日本ジャグリング協会について）

<https://www.juggling.jp/jjf/2024/jp/events/jjf/>

JJF2024CS 予選講評 高橋優弘

本講評では、2024年のJJFCS予選審査を振り返ります。

2024年の予選審査は9名の審査委員によって実施されました。東京以外での開催は久しぶりでしたが、例年通り多くのエントリーをいただき、心より嬉しく思います。

さて、予選審査はJJFのホームページに掲載されている「JJF2024チャンピオンシップステージ開催要項」に基づき行われます。各審査委員は「完成度」「難易度」「構成」「希少性」「エンターテインメント性」の5つの基準で予選動画を採点し、決勝進出の可否を判断します。そして、「可」の数を基に最終的な決勝進出者が決定されます。今年も実力者が揃い、非常に難しい審査となりましたが、各審査委員が公平に審査を行い、協議の末、15組が予選を通過しました。希望者には審査委員からのフィードバックが送付され、私も演者の皆様にフィードバックを書かせていただきました。その中で、特に多くの方にお伝えした3点をご紹介しますと思います。

1つ目は、空間の使い方です。JJFの決勝は広い舞台で行われますが、実際に舞台上立つと観客として見る以上に広さを感じるものです。今年の決勝舞台の寸法は、要項によれば幅約16m、奥行き約14m、高さ約12mとされています。そのため、予選段階からこの広大な空間を意識して構成を考へることが決勝で勝つためにも重要です。空間を大きく使えば、観客の視点を広く左右上下に動かす、ダイナミックなルーティンが生まれます。一方で、空間を狭く使うことで観客の視線を一箇所に集め、没入感のあるルーティンを演出することも可能です。各組がジャグリングのスタイルや目的に沿った空間の使い方を実現できているかが、決勝進出の鍵となっていると感じました。

2つ目は、予選動画内のドロップ数です。ドロップは「完成度」に影響する評価対象であり、特に動画審査ではノードロップの映像が数多くを占めています。そのため、ドロップが動

画内にあるとマイナス要素としてどうしても際立ってしまいます。加えて、ドロップがあるとスムーズにリカバリーしない限り、演技の流れが一度途切れてしまいます。こうした理由から、ドロップは「完成度」に影響を与えるだけでなく、他の審査項目の採点結果にも波及する可能性があり、非常に重要な要素です。予選動画撮影においてノードロップを目指すことは1つの大きな壁となりますが、ぜひベストを目指していただきたいと思います。

3つ目は、技のコンビネーションによる拍手ポイントの有無です。例えば、ディアボロのインテグラルシークエンスのように、技が発展しながら連続して行われ、最後に技が決まった瞬間に大きな拍手が巻き起こる場面がよく見られます。これは単発の技では得られないもので、技の連続により難易度だけでなく、観客の期待や興奮が高まり、盛り上がり生まれるのだと思います。そのため、技のコンビネーションは「難易度」だけでなく、「エンターテインメント性」にも影響する重要な要素です。決勝出場者の多くが、その人にしかできないユニークな技のコンビネーションを作り、いくつもの拍手ポイントを生み出している印象があります。

フィードバックコメントは私だけでなく、メイン道具や考え方が異なる他の審査委員の方々によっても記載されています。この機会をぜひ大切にいただき、次につなげていただければと思います。

最後になりますが、今年の審査委員として、JJFCSの開催の一助となれたことを非常に嬉しく思います。ジャグリング技術は年々進化し続けており、素晴らしい演技を見る機会も増えました。これらの演技の最高峰がJJFCSだと私は思います。これから日本のジャグリング界がさらに発展し、素晴らしい演技に出会えることを心から楽しみにしています。

JJF2024CS 決勝講評 杉戸洋太

今回は例年に負けず非常に盛り上がった見ごたえのあるJJFCSだったと感じる方が多かったのではないのでしょうか。割れんばかりの大歓声やスタンディングオベーションが見られ、活気あふれるJJFCSが戻ってきたことを嬉しく思います。

初めに決勝全体を通しての講評に触れていきます。JJFCSでは「完成度」「難易度」「構成」「希少性」「エンターテインメント性」の5つの審査基準が設けられていますが、今回は例年より増して各選手が重視している項目がはっきりと分かれていたように感じました。特定の項目が抜けて高い選手がいる中でどのような評価をするかといった点は各審査委員も大いに悩んだと思います。また、私が決勝審査委員を担当した2022年、2023年はゲストステージの上演中に審査を行うことで時間が確保されていましたが、本年度は別日開催だったため、短い時間で判断を行う必要があり、こちらも審査を難しくする要因となっていました。

次に各部門についてです。

女子部門は体の使い方や音の取り方に重きを置いた曽我梓さんとデュアルアイドリングを中心に高難易度を貫いた田代萌香さんの一騎打ちの形となりました。予選段階ではかなり拮抗しており、本番の少しのミスの差で決まってしまうような印象がありました。

惜しくも2位となった曽我梓さんですが、マニピュレーションやバランスの個性的なトリックが印象的でした。予選と比べてミスが目立ってしまった点は本人も悔やむところでしょうが、演技へのこだわりは発露されていたと感じました。

1位に輝いた田代萌香さんは全編を通してデュアルアイドリングで構成するという非常に攻めたルーティンでした。高難易度の技を次々に決めていくことで技術力の高さが十分にアピールされており、満場一致での1位となりました。途中、デュアルアイドリング中に腕をクロスするマニアクなトリックもありましたが、しっかりと難易度が会場に伝わっていた点はJJFならではであり興味深かったです。

チーム部門はCompassとkikyuuikiの2組で実施されました。

チーム部門も女子個人部門と同様に、2組で演技の方向性がまったく違う形になりました。Compassは少ない数での現代的なトリックからオーソドックスなナンバーズに挑戦することで難易度を前面に押し出した構成となっているのに対し、kikyuuikiはクラブとボールを組み合わせた独創的なトリックが中心の構成となっていました。

結果としては、高難易度の技を次々に決めていったCompassが1位となりましたが、異種格闘技戦であるジャグリングの審査の難しさを感じました。

男子個人部門は11組で実施されました。

審査内容としては、ほとんどの審査委員が矢田部裕貴さん、石水泰樹さん、ケントさんを上位3組に含めており、その中での順位をどうするかという議論が行われました。

結果としては、難易度が突き抜けていたケントさんが3位、構成が高く評価された石水泰樹さんが2位、どの項目も満遍なく高い評価を得ていた矢田部裕貴さんが1位という結果になりました。

3位となったケントさんは、ルーティン全体を通して難易度が下がるポイントがなく、高難易度の技を常に実施していた点が印象的でした。また、高難易度のナンバーズトリックが中心となっているのにもかかわらずミスが非常に少なかった点も高評価につながっていました。

2位となった石水泰樹さんはステージ全体を上下左右前後と縦横無尽に使い、迫力あふれる演技で会場を自分のものにしていました。パフォーマンスとしての完成度は男子個人部門の中でも頭一つ抜けており、主に構成面で極めて高い評価を得ていました。

そして、1位となった矢田部裕貴さんですが、フラワースティックで初のJJFCS男子個人部門優勝という快挙を達成しました。

高いフラワースティックの操作能力から信じられないようなボディローリングや期待を超えて技をつなげるシークエンスが展開されており、本大会1番の歓声が送られていた点が印象的です。構成も自身の技の魅力を最大限引き出して、技術力を伝えるストレートな形になっており、JJFCSの優勝にふさわしい演技だと感じました。

最後に、ジャグリングは日々進化して高度化、多様化が進んでいます。審査委員会も進化していくジャグリングに対応できるよう改善や体制の見直しなどに取り組んでおります。ジャグリングの発展に貢献できるよう審査委員会一丸となって取り組んでまいりますので、今後ともJJFCSをよろしく願っています。

JJFチャンピオンシップ 入賞者コメント



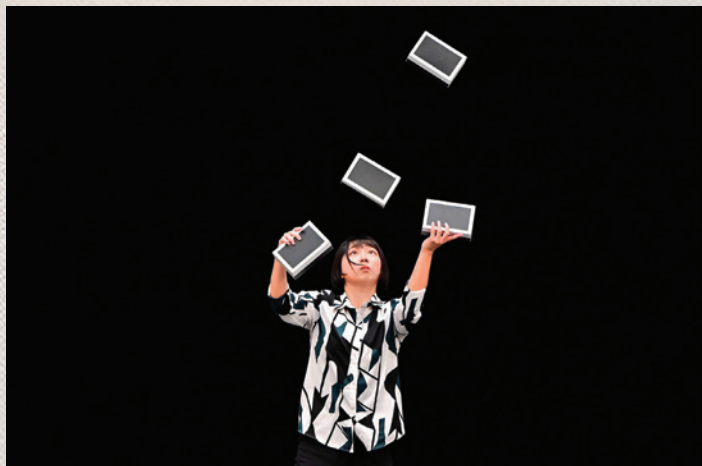
女子個人部門 優勝 田代 萌香

今回、JJFCSという憧れの舞台に立つことができたこと、大変嬉しく思います！少し経った今でも夢だったのではないかなと思うほど楽しく、幸せで、とてつもなく長く、なのにあっという間に過ぎた時間でした。

今回の演技はほぼ全てをデュアルにしつつ、技単体ではなく1つの演目として作り上げること、そして楽しく演技をして、見てもらえる、そういう構成を目指しました。自分なりに挑戦を試みた演技だったので、その一部が少しでも伝わったら嬉しいです。

演技における構成は長い間、自身の中で課題としていた部分でした。たくさんの方からのアドバイスを受け、演技に取り入れてみたり、デビルだけでなくそれ以外の道具をやってみたり、演技を作ってもらったり、チームでやってみたり、色々模索し、それらすべてが経験として自分の糧になったと感じています。

関わってくださった方に感謝申し上げます。まだまだ至らない点も多いと思いますが、制作から練習、本番を通して、やり切ったと言えるくらい頑張ることができたかなと思います。JJFを始めてくれ、挑戦するにあたり色々時間を割いてくれた先輩方、練習に付き合ってくれた後輩達、そして演技を見てくださった大勢の方々とJJFスタッフの皆様、本当にありがとうございました！！



女子個人部門 第2位 曽我 梓

JJF2024CSはこれまで以上にたくさんの方の支えによって出場することが出来ました。支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。

今回は「1つ1つのシークエンスを大切に魅せる演技」をテーマとし、一貫した雰囲気作りや、道具特性と体の使い方を意識して演技を作りました。何度も動画を撮って試行錯誤を重ね、手の位置や体の向き、視線、曲のカウントとのタイミングなど細部にまでこだわって演技構成を組みました。時に「本当にこの部分にこだわったとして見てる人に気づいてもらえるだろうか」と思う瞬間もありましたが、自分の演技が納得いくものへ変わっていく過程は非常に楽しいものでした。（製作当初の演技と見比べると違いが歴然と自分でも驚きます。）最後に、CS出場に向けて学生時代からずっと練習・振り返りに付き合ってくくださったスタジオジャグリの皆様、そして社会人になってから練習場所を提供していただきましたGRIP、西条いきいきジャグ大好きクラブの皆様、そして応援していただきましたすべての方にこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました！！

チーム部門 優勝 Compass

チーム部門にて優勝することができ大変嬉しく思います。JJFCSという素晴らしい舞台で演技ができたこと、大変光栄です。このような舞台を準備してくださったスタッフの皆様、会場を盛り上げてくださった観客の皆様、練習に付き合ってくくださった多くの皆様、その他関わってくださった全ての皆様に感謝申し上げます。CompassはJJF2022に出場した「ばすも♪」のメンバーと練習していく中で結成したチームです。学園祭や中部学生ジャグリング大会などの演技を通して、CSに出場したいという思いが強く、今回出場を目指しました。今回の演技では、過去のCSでは行われていない2人12本パスを成功させることが一番こだわったポイントです。また5本のパートでは向かい合わないトリックを、6本・7本のパートでは今までにないトリックを取り入れ、進化したパッシングを見せられたと思います。二人とも様々なイベントに参加することが多いので、パッシングをしたい方は遠慮なく声をかけてもらえれば嬉しいです。是非一緒にパッシングをしましょう！改めて携わってくださった皆様、本当にありがとうございました！



チーム部門 第2位 kikyuuiki



3回目の出場となる今回は、机を自宅に置いてきて、新しいメンバーとクラブを引き連れて臨みました。

kikyuuikiとしてクラブを使うのは、少なくともJJFでは初めてです。まだ知見がチーム内にたまっていないこともあり、制作は今まででのJJFで一番大変でしたが、本番の日を何とか迎えることができました。辛抱強く付き合ってくれたチームメンバーに、この場で改めてお礼を伝えたいです。ありがとうございます！

ただ、それだけに本番で自分たちの見せたい形が作れなかったことは心残りです。それがJJFチャンピオンシップの場になるのか、はたまた別の機会なのか、いつごろなのか、なにも決まっていませんが、力をつけて自分たちの見せたいパフォーマンスができるよう、リベンジしたいと思っています。引き続きよろしく願い致します。

最後に、このような素敵な場を提供してくださった（そして、それを継続してくださっている）運営の皆様、応援してくださっている皆様、本当に、ありがとうございました。

kikyuuiki かんぱ



男子個人部門 第2位 石水泰樹

2回目の決勝出場と相成りました。前回の2022年から順位は変動しなかったものの、舞台上で感じたチャンピオンシップの熱気は全く違うものでした。CS出場に憧れていた頃に動画サイトで見ていたあのステージでした。盛り上がっていただき本当にありがとうございました。

正直、前回の出場でやりたい技や演出は出し尽くしたつもりでした。…が翌2023の決勝や他の大会を観ると「あれやってみたい、これやってみたい」が不思議と湧いてくるんです。今回の予選撮影ももちろん大変だったんですけど、やりたいことが段々と形になる過程が楽しかったです。結果的に舞台上を走り回ったりする非常に疲れる演技が出来上がりました。

2023年に公開された映画「BLUE GIANT」を観て「ジャズでルーチン作りたい」となったのが今回のスタートでした。この作中でソロ演奏についてこんなセリフが登場します。「自分の内臓をひっくり返すくらい自分をさらけ出すのがソロだろ。」果たして自分は内臓ひっくり返した演技ができただろうか…。まだパフォーマンス探求の道のりはまだまだ長いです。



男子個人部門 優勝 矢田部裕貴

14年前、ジャグリングを始めた時からフラワースティックは良い道具だと思っていました。ハンドスティックにより身体は拡張され、ベル（センタースティック両端の飾り）の存在が回転制御を容易にするとともにボディローリングをはじめとする多彩な技を生み出しています。このように素晴らしい道具であるはずのフラワースティックですが、JJFCSにおける活躍という観点からは他道具の後塵を拝し続けていました。特に、デビルスティックが男子個人部門に幾度も出場し3回も優勝していることは、フラワースティックの潜在能力の高さを確信させると同時に、それが未開拓であるということを感じ付けられているようでした。

今回、JJFCS男子個人部門としては初めてフラワースティックで優勝を果たすことが出来ました。本番の演技の完成度は率直に申し上げて練習より下振れたものではありませんが、にも関わらず優勝という結果を頂けたのはフラワースティックのポテンシャルの高さ及びそれを引き出したことが評価されたのではないかと考えています。その意味で、今回の結果については、私個人が勝ったのではなく、フラワースティックに取り組んだ人達による蓄積（もちろんデビルスティックをはじめとする他道具を扱う方々の知見を多分に含みます）が高い水準で花開き、その時たまたま私が最前線に居たということだと捉えています。今までフラワースティックを支えてきた方々に感謝するとともに、今回の結果をきっかけとしてこの面白い道具に興味を持つ方が一人でも増えてくれることを願っています。



男子個人部門 第3位 ケント

今回、JJFCSに出場するにあたり、伝えたいのは感謝です。本当にたくさんのジャグラーに支えられてこの舞台上に立つ事が出来ました。ルーチン作成において弟のカイト、それからボールジャグラーのヒトさん、この2人がいなければこのルーチンは完成しませんでした。2人から新しいサイトスワップを教えてもらい覚えた技を片っ端からルーチンに入れ、音楽と合わせながら技の順番を考えて作りました。また、完成したルーチンは練習会で一緒になったジャグラーに必ず毎回一度、多い時には2度、3度と見てもらい本番を想定した練習に付き合ってもらいました。

また、翔人や同じくCSを目指し練習をしていたジャグラーがいた事も僕の中で大きなモチベーションにも繋がっていました。翔人のルーチンの安定度は僕がルーチン作成をしている段階から非常に高かったので、すごく心の中で焦りがありながら練習をしていました。そして今回のCSに惜しくも出場出来なかったジャグラーの思いも乗せて今回の舞台にぶつけました。

また、共にCS出場者の矢口純さん。OJG並びにWJD(ワクワクジャグリングデー)等、実際の舞台上で演技を発表する場を設けて頂けたのが、本番でドロップを抑えることが出来た1番大きな要因でした。大会特有の緊張感とトスの感覚のズレを事前に確認出来たのは大きかったです。

最後に僕の事を応援してくれた皆様、本当にありがとうございました。悔しいです。

JJF2024 チャンピオンシップ

決勝審査結果

予選・決勝審査委員：杉戸洋太（審査委員長） 松永将汰 岩倉玲 八幡雄士 小澤駿弥 鈴木仁 高橋優弘 山本孝 西川歩美

決勝進出者

- 男子個人部門
- 鳥居岳史、川端光輝、矢田部裕貴、石水泰樹、ケント
中村拓也、市川卓、矢口純、ラクト、谷岡翔人、貫井洋介
- 女子個人部門
- 曾我梓、田代萌香
- チーム部門
- Compass、kikyuuiki

審査結果

- 男子個人部門
- 1位：矢田部裕貴 2位：石水泰樹 3位：ケント
- 女子個人部門
- 1位：田代萌香 2位：曾我梓
- チーム部門
- 1位：Compass 2位：kikyuuiki

【男子個人部門】

エントリー名	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	審査員F	審査員G	審査員H	審査員I	順位点合計	補正	合計	順位
鳥居岳史				4					5	5		5	
川端光輝	6					4	6	4		8		8	
矢田部裕貴	1	1	1	1	1	1	2	2	3	79		79	1
石水泰樹	2	2	2	2	2	3	1	1	2	67		67	2
ケント	3	3	3	3	5	2	3	3	1	49		49	3
中村拓也		5	6	6					6	5		5	
市川卓						6				1		1	
矢口純	5	6	4		6		4	6		11		11	
ラクト	4	4	5	5	4	5	5	5		19		19	
谷岡翔人									4	3		3	
貫井洋介					3					5	-5(※1)	0	

【女子個人部門】

エントリー名	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	審査員F	審査員G	審査員H	審査員I	順位点合計	順位
曾我梓	2	2	2	2	2	2	2	2	2	63	2
田代萌香	1	1	1	1	1	1	1	1	1	90	1

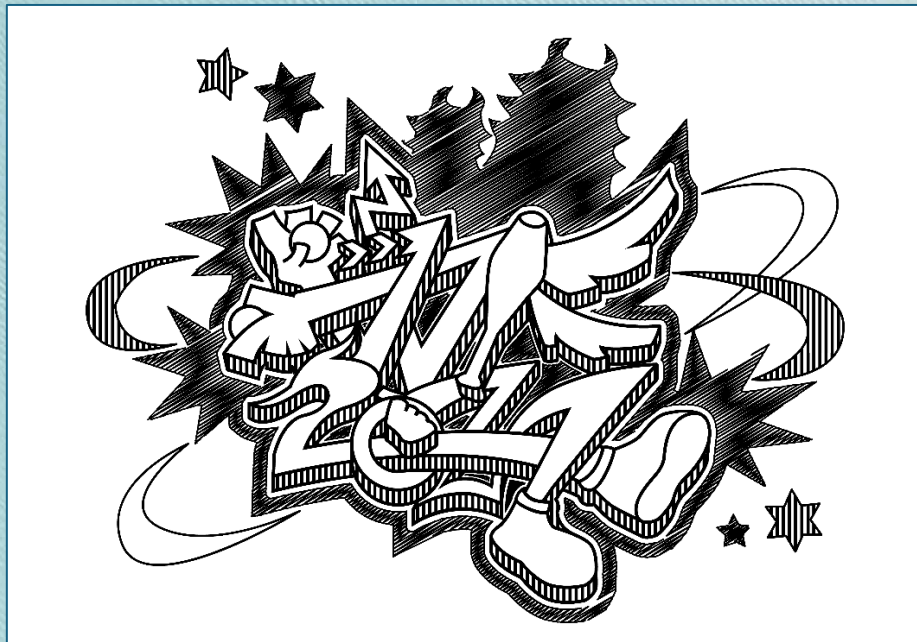
【チーム部門】

エントリー名	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	審査員F	審査員G	審査員H	審査員I	順位点合計	順位
Compass	1	1	1	1	1	1	1	1	1	90	1
kikyuuiki	2	2	2	2	2	2	2	2	2	63	2

※1 演技時間超過時間（10 秒未満）に対する減点となります。
※2 7 位以下の順位には審査点が付きません。順位点は 1 位から順に 10、7、5、3、2、1 点となります。

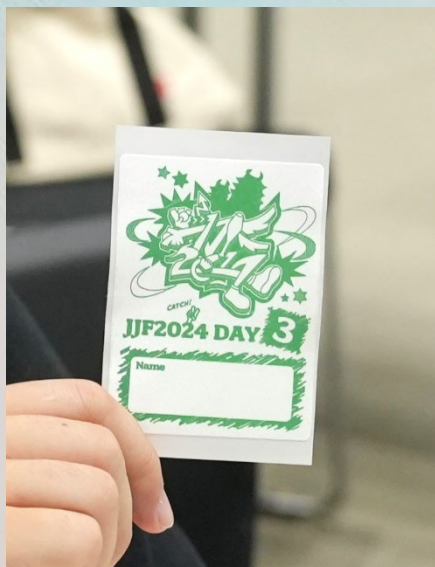
JJF2024 ロゴデザイン

制作：へびのあし (DASOKUN)



【制作者コメント】

姫路といえば姫路城！ということで、メインコンセプトとして姫路城を採用。別名「白鷺（しらさぎ）城」からも白鷺の頭と翼のモチーフを取り入れました。JJF地方開催の醍醐味である「全国のジャグラーが地方に赴いてみんなでジャグリングをする」という観点から、地方に赴く「足」、ジャグリング要素としてはクラブ、ボール、リング、ジャグリングをする「手」の要素をブレンド。全国から集まるジャグラーたちが技を見せあい・競いあい・教えあうこのイベントに多くの人々が参加することを期待し、上記の全てのコンセプトを混ぜ合わせて「JJF2024」というイベント名をかたどっています。



Arttu Lahtinen (アルトゥ・ラハティネン)

フィンランド出身のリングジャグラー。ゆったりとした滑らかな動きの中に、独自のボディロールを組み込んだスタイルが特徴。2018年にスウェーデンの名門ダンス&サーカス大学DOCHを卒業。パリで毎年開催される有名なサーカスフェスティバル「シルク・ドゥ・ドゥマン」にも出演経験有り。丸い形をしたオブジェクトに関心が高く、柔らかくしなやかな動きとその道具をいかに組み合わせるかを探求している。



ゲストインタビュー1

Arttu Lahtinen & Stina Otterström (OLO Company)



OLO Company (オロカンパニー)

OLO Companyは、スウェーデンを拠点とするサーカスカンパニー。サーカスアーティストであるStina Otterström (スティナ・オッテシュトロム) とArttu Lahtinenの2人組。2人はストックホルムのダンス&サーカス大学DOCH在学中に出会う。いくつかの仕事を共にするうち意気投合し、共同でショーを行うことになる。2023年には、第一作品であるワイングラスと木の板を使ったショー「Soft Spot (ソフト・スポット)」を初公開。「もろさ」をテーマとし、倒立とジャグリングを織り込んだ作品である。



凡例

インタビュアー アルジェ

Aruttu (アルトゥウ)

Stina (スティナ)

通訳・文字起こし 青木直哉

アルトゥウについて

ゲストステージを終えての率直な感想をお願いします

とてもいい気分ですよ

そうね

こんなに大勢のジャグラーの前で作品を披露できたことも嬉しい。

ゲストステージのオファーを受けた時にどう思いましたか

とても光栄でした。ずっと JJF には来たかったし、日本のジャグラーにも会いたかったからそういう意味でも、ついに来られた、って

最初は、招待をうけて舞い上がっていたんだけど、その期間にすでにフィンランドでショーの仕事があったことを思い出して

そこで、1ヶ月その仕事をずらすことはできるかと聞いて、そしたらそれが可能だって言うので、やった！と喜びました。

演技についての質問です。

ソロのリングについて、卒業演目をやったということで作品についてこだわったところは

このアクトでは、一つのコンセプトを見せ切るということにこだわっています。

ボディロールと、リングが身体に接触した状態で技を行うというところ。

あとは、ジャグリングで一番自分が楽しいと思うことを盛り込むようにしました。

具体的に言うと、ボディロールを多用するということですね。

他に演技の中に特にこだわったところは衣装や技など

今言った以外に具体的にどうとは言えないけど

ひとつのコンセプトに深く潜っていく、ということは徹底しました。

実際、それ以外にはそれほどないですよ。

ひとつのコンセプトを育て上げる、というところでシンプルなアイデアからスタートしてより複雑なものにしていくという。

あとはジャグリング自体が多くのことを語っている。

ジャグリングのことはジャグリングに語らせるべきである、と信じているので、かえってそれ以外の複雑なレイヤーを加えたくない。あまり衣装や、演劇のよう

な要素を入れたくない。シンプルにジャグリング自体にどう語らせるか、ということを追求しています。

先ほど、板津さんと喋っていましたが、道具にはこだわっていますか

とりあえず、道具を使用するときには、アクトの中では、道具に敬意を払うようにしています。このリングは自分の作品の中で重要なものだ、という意識ね。

そして僕のアクトの中でやる技というのは、PM リング以外のリングだとあまりうまくいきません。サイズだけの話じゃなくて、プラスチックの材質とか昔持っていたミスターバッシュのリングでは、今やっているような動きはやっていなかったわけだし。

PM リングを手にしてからはこれならこの技、うまくいくじゃないと思って、他のリングではできません。

PM リングは演技の中でも重要な役割を演じているというわけですね。

おそらく一番重要な役割だと思うな。

PM リングをいま無くしたとしたら、もしこのリングがもう手に入らないとしたら、どうしたらいいかわかんないよ（笑）

作り手の板津さんと会ってどうでしたか

話ができて感激でしたよ。あとは初めてこの手作りのリングを手にした時とても手込んだものであるということが、すぐわかって、これを作っている人というのはどんな人だろうと思っていた上で会ったのでとてもいい出会いでしたよ。

他のショップだとオンラインでリングを頼んだとしても、確かに翌週には新しいリングが届いているけど型で成型されたものだし、ある意味では、魂の入っていないリングとも言えるし。でもこの PM リングは全く反対の印象があって、作り手の人が入っているな、と感じます。



日本、JJF について

初来日ということですでに日本を楽しんでいると思いますが

練習会に参加したり、観光をする中で思い出に残ったことはありますか？

素晴らしいと思います。ジャグリングにみんな情熱を持ってて。

まずはジャグラーの数という点で驚いた。あとはジャグラーが毎週集まって

ジャグリングをしているということ決まった曜日にやっている

その中でみんなが精を出してやっているということがコミュニティを作り出している。そう強く感じる。

また自分にとって刺激になったのが、個人のレベルに関係なく

個々人が身を入れてやっている感じ、全員が同じような強さで情熱を持ってる

それが刺激的だった。

あと日本に来て観光ではどこにいきましたか。何が楽しかったですか

まずは横浜にきてそこから東京に行ったり、そのあとは日光に行って
東照宮も見て、華厳の滝も見たし、それから草津の温泉にも行って、たくさんの
山も見たし、町の周りにも山が見えるし、それから大阪にきて、京都に移動して
そこで僕は、Juggling Donuts（注 1）にも行ったよ 2 回も
日本のジャグリングクラブがコミュニティとして素晴らしいのは、みんなが楽し
みのためにやっているということみんな、趣味としてやっているわけでしょう
科学とか文学とか、自分の勉強をする傍らでやっていたり、仕事の傍らでやって
たり
それでいてジャグリングのレベルも高いんだからね。

日本に来て、驚いたことはありますか

ある意味、いっぱいあるんだけど、文化も違うし
ひとつあげるとしたら、お店がでかいよね、ってということかな
ひとつのお店が 7 階分あったりするし…。
（青木：でも、行ったのが銀座の無印良品とかユニクロとか、日本の中でも大きいところばかりだったから（笑））

食べ物とかで何かありますか

全部美味しいね

お気に入り？

いなり、ラーメン。
たこやきもいいよね
湯葉もいいよね。いろんなバリエーションの湯葉を食べたんだよ
日光で湯葉そばとか食べたんだよ
美味しいし、食べ物自体にもいろんな種類があるってというのがいいよね
それは食べ物だけでなく、街にも、東京、横浜みたいな大きな街がある中
で、ちょっと外れれば居住区は静かだったり、ってバリエーションがあるのも面
白い。

JJF をヨーロッパのコンベンションと比べて、どういう印象を持ったか。まずはイベント自体については

まずは、人数が多いってことだよな。もちろん EJC は特殊で話が違うけど、でもそれを除けば、圧倒的に数が多いよね
あとはジャグリングへの真剣さというのかな。もっと日本の方が真面目に、真摯にやっている感じがする。
デビルスティック、フラワースティックとか、他では見ないような道具もたくさん見るし。
自分としては、リングジャグラーとして、これだけリングジャグラーがいるっていうのは嬉しいよね。2 年前にガラショーに呼ばれて、ルブリンの EJC 行った時なんか、リングジャグラー 3 人しかいなかったよ。悲しかったよ（笑）
ヨーロッパではリングジャグリングはもう死んでいくような印象を受けるけど日本のこの状況を見て、希望があるように思えた。

CS、大会についてはどう思いますか

ユニークですよな。人生でも見たことがない。
ある意味では、他のサーカスコンペティションと似ているところもある。
いろんな道具があって、ひとつの分野で戦うわけじゃないってところとか。
サーカスフェスティバルでも、いろんな分野の人が同時に評価されるわけだし。

コンペティションは日本の方がとても真剣だよな

それでいて、こんなにたくさんの道具が競えるだけの素地が全ての道具にあるっていうのも驚きだしね。

印象に残った技、人はいますか

ディアボロのタクヤ（注 2）。個人的には、技だけでなく
音楽や衣装も気にするんだけど、舞台上ではそれらが一体になっているわけで
その意味でタクヤが良かった。
競技という性質上それが意味のないことだったとしても、それが重要じゃない、
って人がいるのも当然理解できるけど私としては意味があることだから
あの演技が良かった音楽と衣装の調和が取れていた気がして
タクヤの在り方はとても良かったし、でも当然、優勝した矢田部さんは序盤からいきなり衝撃を受けた。信じられないよね。とても安定していることも印象的だった。
ステージ上でそれだけリスクをとっているというのがパフォーマーとして働いて
いる身からしても、あれだけのリスクをとっているというのが面白かった。
勇気のいることだよな。僕がいつもやる演技っていうのはいくつか挑戦をする瞬間もあるんだけど、CS では、すべての瞬間に、限界まで挑戦をしている。そこが印象的。
僕は普通、ゆっくりビルドアップ、盛り上げていくけど、CS では最初から最大火力、みたいな感じだよな。



OLO カンパニーについて

まず簡単な紹介をお願いします

アルトゥと私の二人のカンパニーで単純にショーを作りたくて始めた。
ショーを作るためにはカンパニーが必要だったから
今やっているショーは「Soft Spot」だけだけど、それは元タスティナのソロのショーを元にしていて。ワイングラスの上を歩いたり、逆立ちでグラスを拾ったりとか。以前に、二人で同じ場所での契約で仕事をしていたことがあって、舞台袖からタスティナのソロを見ながら、もし僕がグラスを動かすとしたらどうするかあ、とかジャグリング的な要素をアクトに入れていったんだよな。

このアクトでお客さんに伝えたかったこと、特にこだわったのはどういうこと？

まずは現実的な問題からスタートしている。元々はテーブルを使う場面があった
んだけど、でもそれは輸送の問題からできなかったから、
だから、逆に何を運べるか、というところから始めた。
それで、この枚数の板とグラスは運べるな、というところから決めて。そこからスタートしている。それから今回抜粋として見せた中では、ジャグリングだということを提示しやすい、つまりジャグリングらしさが見えやすいシーンを選んだ。
アルトゥがグラスと板だけで一人で見せるシーンを入れたのは良かったよね



2020年にオンラインでGSへ出演して、それから日本に来るまでに何か変化はありましたか

スウェーデンではコロナの最中、規制が緩くて、でも劇場はまだ閉じてて、だから学校でのショーをたくさんやりましたよね

それで、三人組で、スウェーデンの学校を回ってツアーしましたね

自分で車を運転して、ショーをしたり、ワークショップをしたり

そういう意味では、仕事を続けていくことができて

その間に、二人でショーを作るためのクリエイションに取り組むこともできましたね。助成金の申請とかもそうだしフィンランド、スウェーデン、スイス、いろんなところに申請した。それからちょっとずつ予算ももらうことができてそれから4年を経て最終的に日本に来ることができたのはとても良かった。今までの人生で一番いいジャグリングの旅だったって、自信を持って言えるよ。

最近アップロードされた新しいビデオ Lunch Time もありましたし WS ではその中の技もやっていましたけどリングジャグラーからの反響はどうでしたか

みんなとても優しく接してくれたし、何よりすごく感謝をしてくれたのが印象的です。幸せな気分になりましたよ。みんなが僕と練習できたということは僕がみんなと練習できた、ということでもある

みなさん、わざわざこっちにきて、ちゃんと言葉にして感謝や感想を伝えてくれる、っていうのが素晴らしいですね。面白いと思ったらそれを言ってくれるしヨーロップでは…まあ、なんでもかんでもヨーロップと比べるのもなんなんだけど(笑)

見ていて何か思うところがあっても、それをいうとは限らないしね。

向こうではみんな、もっと個人の殻に閉じこもっている、っていう感じがしますよ

でもこっちでは、伝えてくれるのが嬉しい。

おわりに

アルトゥ個人と OLO カンパニーに関してこれからの展望は

僕らふたりにとっては、ショーを売ることです。

長い時間をかけて作ってきたショーだし初公開したのは一年前くらいでいくつかのショーケースに出してきてプレゼンテーションをしてきた

スウェーデンでもカナダでも

これから、スイスでもやりたいと思っているし、まずは世界に知ってもらうことが目標。今の所は、ネットワークを広げて、繋がりをつくること。だから

いろんなフェスティバルに行って知ってもらいたい。

すでにフィンランドでは、やることが決まっているけどね！

(青木：JJFのために延期してもらったやつね笑)

アルトゥ個人では？

今は新しいマテリアル、コンセプトについて研究している最中で、

今はアクトしかないけど、もう少し長いショーを作れないかなと思っているところ。同じアクトをずっとやっているとし新しいものをクリエイションする時間ってなくなったりするものだけと

ここ2年くらいは僕個人としては、何か新しいものを作りたいなあ、と思っているところでそれは僕がジャグリングの中でも面白いと思うところなんだよね。新しいものを作って、それをシェアすること

OLO の普段の練習はどんなふうに行っていますか

ラッキーなのは、ストックホルムに住んでいて、トレーニングスペース（注3）がちゃんとあるところ、いつでもそこに行けてグラス割っちゃったりしても大丈夫で助かっています。

で、ここに来る前、小さめのスタジオでショーをリハーサルしていたんだけど3つのバージョンを練習しなきゃいけなかったんですよ

JJFで披露したバージョンと、外でやる30分のバージョンと、それから日本から帰ったら、フル尺の1時間のショーをやる予定になっているから2週間の間、違うバージョンを毎日練習していました(笑)

それぞれ、やっていることは似ているんだけど、流れが全然違うんですよね微妙に違う部分が多くてね

JJF用の演技を作るにあたって、すんなりできたのか、ずいぶん考えたのか

JJFのものに関しては結構さっとできましたね。

でも場面転換のところが、悩みましたね。本当はエンディングを本番でやったものとは少し違うものにする予定だったんです

板を全部置くという演出の代わりに、板とグラスを交互に重ねてタワーを作る、というのをやろうと思っていたんですよ。前日まで悩みました。

でも最終的に辞めましたけどそれを入れるべきか、入れないべきか、という議論これって安定してできるかな、というところ、そういうところの見極めには時間がかかりましたね。

SWJの読者に伝えたいことはありますか

言うことあるかなあ。

今のままで、ぜひそのまま突き進んでください(笑)。



注1：京都大道芸倶楽部 Juggling Donuts。

注2：中村拓也。ディアポロプレイヤー。JJFCS2024 決勝進出。

注3：彼らは「サーカス・シルクール」というサーカスカンパニーが運営するスペースで練習しているとのこと。

ゲストインタビュー2

深河あきら



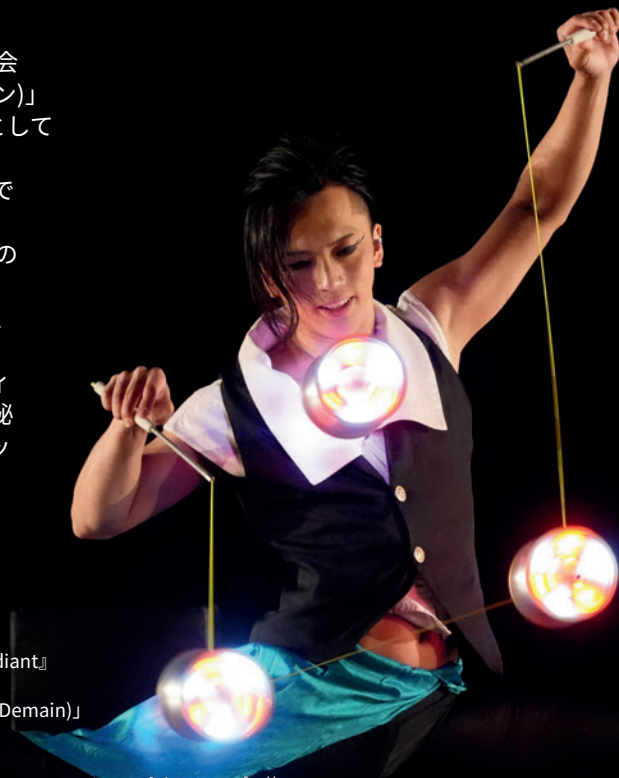
アート×身体表現×ディアボロ

フランスのパリにて開催されたサーカスの世界大会「Cirque De Demain 2016(シルク・ドゥ・ドゥマン)」にて史上2人目の日本人ディアボロパフォーマーとして決勝に進出。

身体表現を駆使した踊るような演技「Loadstar」で舞台を駆け巡り、審査員特別賞を受賞した。

その技術が認められ「シルク・ドゥ・ソレイユ」の公式登録アーティストとして認定されている。

現在、京都のノンバーバル公演『ギア-GEAR-』や、オペラなどの舞台公演のほか、ヨーロッパの劇場での長期公演や、海外のテレビ番組出演などメディアでも活躍中。イベント・場所を選ばず独特の神秘的な世界観と、感情豊かで躍動感あるドラマティックな表現で観客を引き込んでいく。



実績

- ワールドパフォーマンスフェスティバルin大阪最優秀賞『Radiant』
- 2023年ロシア国際サーカスフェスティバル 審査員特別賞
- サーカス世界大会「シルクドゥマン2016年2019年(Cirque De Demain)」審査員特別賞受賞×2
- 4ディアボロ公式日本記録保持
- JJF2007, 2009, 2011, 2012 チャンピオンシップ決勝進出 JJF2010, 2014チャンピオンシップ3位
- ジャグリング世界大会『International Juggler's Association 2012』ファイナル進出
- 台湾雑技大会「インターナショナルアクロバティックフェスティバルin台湾」準優勝
- 2010年シルク・ドゥ・ソレイユ公式登録

主な出演経歴

- ノンバーバル公演『ギア-GEAR-』レギュラー出演
- ワールドパフォーマンスフェスティバルin大阪
- 大道芸ワールドカップin静岡
- オペラ公演「セビリャの理髪師」ジャグリングパート
- GOP Variete Theatre『SLOW』『Sombra』
- 2024年現在『Stylez』出演 ドイツ7都市ツアー中



アルジェ(以下、ア)：自己紹介をお願いします。

深可(以下、深)：ジャグリングを始めたのが小学校一年生なので、そこから数えるともう28年近くやっております。真剣に取り組み始めたのが中学校三年生で、高校卒業時にはJJFに出ようと思って頑張っていました。最近はいろんな拠点を転々としてステージに出演させていただいています。一番は関西がメインで、京都にある『ギア-GEAR』(注1)に出演したり、望月ゆうさく(注2)と一緒にYOA(注3)に出演したり、高取慶耶という倒立で著名な方と福岡で「SHINKA」(注4)という舞台と一緒にやらせていただいております。

ゲストステージについて

ア：まずは率直に、GSを終えての感想をいただけたらと思います。

深：素直に言いますと、悔しかったです。Loadstarの3ディアボロのパートを失敗してしまったのが本当に残念でした。5個のハイトスも、本番では綺麗に決まったように見えるんですが、実はフラッシュが決まっていなかったというもどかしさもあります。

本番は震えが止まらなくて、今までのJJFCSに出演したことがある身からして、悔しい思いとか嬉しい思いとかすべてがそのまま、死ぬのかなと思うくらい、感情が一気に押し寄せてきて、舞台上で泣きそうな状態でした。司会のダイチさんに名前を呼んでいただいてステージに上がった時には、涙が止まらなかったです。

ジャグラーの前でちゃんとしたものを見せたいという気持ちがあったんですけど、やっぱり、ジャグリングって完璧じゃないところが面白いじゃないですか。だからこそ追求し続けて、できるところまでやっていくっていうのがジャグリングで、そのすべてが完成した瞬間が自分にとっての感動だし、お客様にとっての感動だと思っています。でも失敗があって、頑張れという気持ちがあるからこそ、ジャグリングの素晴らしさが詰まっているとも思います。なので、ゲストステージは本当に面白かったです。ジャグラーの皆さんがあんな風に盛り上がって、応援してくださったのが素晴らしくて、改めて良いステージに呼んでもらえたなと思いました。

ア：GSのオファーを受けた時の心境をお聞かせください。

深：GSは、ずっと呼んでほしいという気持ちがあったので(笑)、連絡が来た瞬間に「クロ助さん！覚えていて下さったんだ！」とすごく嬉しい気持ちでした。もうCS出場から十年も経っていると思いつつ、ありがとうございます、頑張りますと思ってオファーを受けたんですが、その後心配や不安な気持ちで結構強く出てしまったんです。なんで今なんだろう、ジャグラーのみんなが喜ぶ内容はどうやってできるだろう、今何が伝えられるものがあるのかなっていうことを、当日までずっと必死に考えて新作を作りました。

JJFは、今では全国トップクラスのフェスティバルと言われても過言ではない技術力を持っていて、海外ではスキルバッグというあだ名がついているぐらいのコンテストなんです。そのステージに立たせてもらえるなら、自分がどのようにジャグリングと向き合ってきたのかを全て出そうということが、僕の中で一番大切なものになりました。

実は過去のJJFで、当時の理事に「GSへ出してくださいよ～」と話したことはありました。その時は残念ながら機会に恵まれませんでした。世代によって見たいものが毎年違うということに、若いジャグラーと触れ合うことが多くなった最近になって気付きました。

ア：ジャグリングの活動歴が長くなっていくうちに変化があったということでしょうか。

深：変化があったというより、どちらかという、もうジャグリング界に入っていけなかったんですよ。プロになると、いろいろなパフォーマンスを作らないといけない、海外に行って団体行動をしないといけない、となって、時間がなかったんです。

ただ、自分の世界を作りたい、一緒に練習する人を作りたいということで、できるだけ日本にいる時はジャグリングの練習会に行くことを心がけています。今はスポーツ競技の方向に目がいつているけど、舞台に出たいジャグラーも増えてきていると聞いたりすることで、やはり日進月歩でジャグリング界も変わってきているんだなと感じています。

sunriseについて

ア：ゲストステージの演目は2つありましたね。まずは1つ目のsunriseについてお聞かせください。

深：オファーを受けたときから使う曲を考えていました。実は、sunriseは、当日ぎりぎりまでテーマが決まらなかったんです。前日はどうしようって悩みなからチャンピオンシップを見ていて、技術もどんどん上がっていくし、皆さん見せる努力をしていると感じていました。特に矢田部くん(注5)は、チャンピオンシップに出る前にたまたま中之島の河川敷のあたりで練習しているのを見つけたことがあって。「上手いですね、今後はどうするんですか」と尋ねたら、「CSに出たい」と返ってきたので、ルーティンを見せてもらったんです。彼は舞台の作り方を知らなかったの、色々アドバイスしたら、本番でそれを全部取り入れてくれたんですよ(笑)。終わった後も、あきらさんに教えてもらった話をしてくれて、とても印象に残っています。

そんな思い出もありつつ、ジャグラーのみんなが頑張っている、その次には希望があるんだよ、忘れないでねという気持ちがすごく強くなって、テーマがsunriseになりました。苦しいスタートだけど、必ず日は昇るから、しっかり顔を上げて進もう、という思いで演技を作りました。

実は、僕の名前に入っている「晃」という文字が、日に光と書いて日の出という意味があるので、日の出は自分の人生のテーマでもあるし、絶対これにしたいと思いました。

ア：特にこだわった部分はどこでしょうか。

深：もう技術は見せないって決めたんですよ。技術がないように衣装や立ち振る舞いをきれいにさせる、体の作り方をどのように見せるのかを考えました。そして、ジャグラーらしくない演目のスタートは何かいいのかを考えて、お芝居かな、と思いました。それで、自分がどういう気持ちで舞台に立っているのか、すべてさらけ出そうと思いました。

舞台の使い方にもすごいこだわりがあります。本来は、下手からのスタートが多いと思うんですけど、今回は上手スタートにしています。日本人の物の見方は、グラフを右肩上がりとして表現するように、左から右へ上がっていくのが一般的

なんですね。そこをあえて右からスタートして、最後上手を見て終わるというところを一番こだわっています。

他にも体のラインやスタートの入り方はこだわりました。僕の中ではディアボロがスタートなので、ディアボロが転がって捕まえて、そこから優雅に踊ったり、体の側面を転がしたりして。体で色んな遊びをすることって面白いんですよね。そうやって自分たちが考えてきたものはたくさんあると思います。僕もそういう遊びをいっぱいしてきたからそれを取り入れたいという気持ちがあって。手を転がしたり、手首辺りでひっくり返したりとか、そういう動きを繰り返していました。本当はシガーボックスで首に挟んだり、足に置いたりする技がディアボロでも出来るので、3ハイトスを全部回収したあとに足首において、ポーズを入れたかったんですが、3つをやってしまうと2つができなくなってしまうので、今回はやめました。どういう技なのかは、今度SNSで紹介したいと思います。

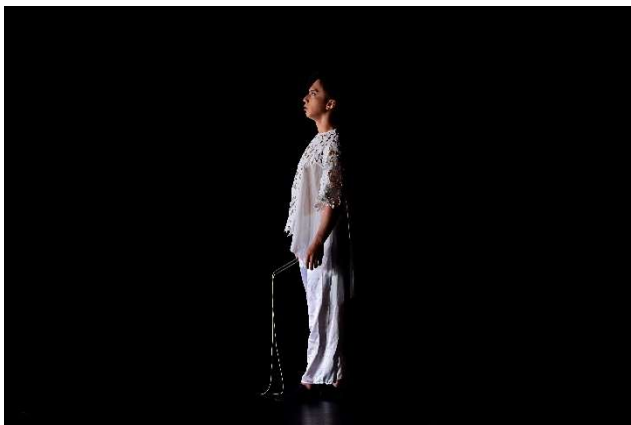
ア：衣装のこだわりについてもお聞きしたいです。

深：衣装は必ず白色のものにしようと考えていました。事前にフラトレスさんが黒い衣装と聞いた時に、全員が黒だったら面白くないから、自分は照明に当たって浮き出るようなものにしたいと思いました。ステージの背景も大黒（注6）なので、白だと舞台上から浮き出るとですよ。舞台の奥側が消える照明なので、基本的には衣装を白にして体を動かした状態でやろうと思いました。白は、絵の具のパレットのイメージで、なんでも書けるという意味もあります。

僕は結構自然が好きで、自由に何かをやる時、物事を考えるときに必ず自然を見たり、自然に触れたりとか、服を着ないで水にばちゃんと入ったりとかしています。だから衣装は花柄なんです。心残りは靴が黒色だったことですね。

ア：メイクもされていますよね。

深：はい。sunriseのメイクはLoadstarと同じです。2つの演目が続いていることと、僕の始まりはLoadstarであることを伝えたくて、全く同じ状態にしています。



Loadstar について

ア：続いて、2つ目の演目、Loadstarについてお聞かせください。

深：Loadstarを作るにあたってすごい挫折をしています。いっぱい悩んでJJFやIJAに出たいという気持ちがあって。JJF2010は予選通過して、11年がチームで、Licht（注7）というグループで出て、自分で作ったソロ作品が予選に落ちてしまったんですね。それが大道芸やステージでやっているステップというショーで、普通のショーマンシップ、ただのショーの内容なんですけど、技術がそこまで評価されなくて落ちてしまいました。何か新しいものを作りたいと思った時に、たまたまLoadstarという曲に出会い、これで演技をやりたいと思いました。また、周囲からも良く似合っていると言ってもらえたので、新しいレーティンを作って台湾のディアボロ大会に出場しました。その演目は大体の流れを作った後は、技は何も決めずアドリブで演技したのですが、結果は準優勝でした。そし

て、ほぼアドリブで準優勝ということは、演技を固めれば更に上に行けると思いIJAにチャレンジしました。

また、2013年にTrueAct（注8）に呼ばれたときにも、更にブラッシュアップできると思ってずっと練習していました。そうしたら、いつの間にかJJFCSのエントリー期間が来てしまって焦って予選動画を提出したら、詳細はわからないのですが、どうもギリギリだったようで。やっぱりレベルが高いなあって思いながら、いやもう自由にやろうと思った2014年。タイムオーバーだったんですが3位を取らせていただきました。

一同：（笑）。

深：結果を聞いて「よっしゃ！」ってなったんですけど、タイムがギリギリだったんですね。どれぐらいオーバーしているかわからないですけど、マイナス20点されていて、ひたすらへこみましたね（笑）。

まあでもここで3位を取って、更にブラッシュアップしていくことができたと思います。それで時間をかけて、ようやく花咲いた作品だなと思いました。ここからまたLoadstarとその次があって、予想がつく公演回数で、100回とか500回ってすごいと思うじゃないですか。Loadstarはすでに1000回ぐらい公演しているんですよ。だからみんなが知っている最初のLoadstarはもうなくて、今は新しい、一般のお客さんに観ていただいているLoadstarが主に披露しているものです。でも初心を忘れない気持ちがあって、落としたり悔しいと思うし、できなかった技っていうのは苦しいと思います。ただもっと今以上にレベルを上げないと、若い世代のジャグラー達には勝てないし、負けていられない気持ちもあるので、まだまだ頑張ろうかなと思います。

Loadstarは、必ずみんなが知らないものを作る、難しい技をやることを心がけているんですけど。で本当は完成させたいときは四つを五つにして終わりたいんですけど。でも五つではもう手が足りないです。僕の使っているディアボロは固定軸なんです。今はベアリングが主流ですけど、僕のこだわりが絶対ベアリングを使わないことで。固定軸だともう手が攣るとですよ、最後の最後で。だから5つはかなり厳しいんですよ。だからこそ最後の曲が流れたところで5個に挑戦する予定だったんですけど、手が攣っているから（笑）、やるかどうか悩みながら、お客さんも、これを見ているみんなの拍手が止まないじゃんって思って、じゃあやるって決めて、それでやったって感じです。元々、リハーサルでは5個もやっていたんですけど、ミスが多かったのでやめておこうかな、と思っていました。ただ本番は歓迎して頂いたので、もうやらないといけないよねっていう気持ちでやりました。

Loadstarに関してはもう変化しすぎて、都会と自然のなんかよくわからない境目のあたりにいる、風来坊みたいなイメージです。



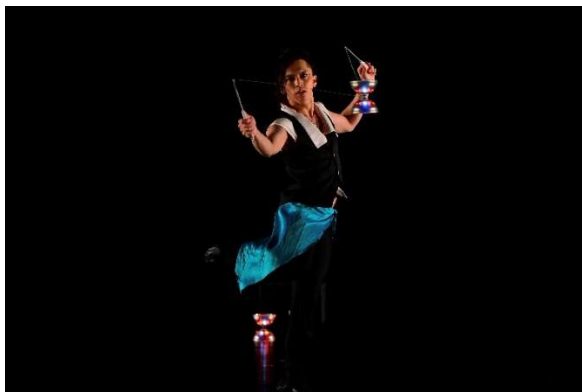
プロとしての活動

ア：CS に選手として出られてから、現在はプロとして活動する中で、ジャグリングの向き合い方などに変化はありましたか。

深：選手だった時は、技をしっかり決めないといけない、今ない技術を作らないといけない気持ちがありました。希少性もすごく重要だと僕は思っているんですけど、この業界でなくなるもの、基礎力です。見せ方と立っている時の姿の美しさ、スピードループするだけでどれだけ綺麗になるのか、端返しだけでどれだけ綺麗になっているか、カスケードをどれだけ綺麗にできるのか。それってやっぱり、基礎力がなければお客さんは納得しないんですよ。手が高かったりして形が悪かった瞬間に、ん？って引かかる、安心感が無いって感じるんですよ。なので、どの時代でも大切にしたいのは基礎力だと思います。基礎があるからこそ、お客さんがどれだけ難しくきれいなことをやって、ちゃんと丁寧に見せた上で技をやるからすごいって認識してくれる。いきなりすごいものを見せてもお客さんは説明がないからこそ分からない、っていうのはジャグリングの本質ではないですか？というのが僕の思いです。

ア：海外での活動もすごく精力的にされていますよね。こういった意識で活動されているのでしょうか。

深：色んな人に声をかけることを大切にしています。僕もコミュニケーションが苦手と言うか、話しながら考えを纏めるのが苦手と言うか、話している内に話が脱線してしまうことがあって。だからこそコミュニケーションをしっかり丁寧にとることが大切だと思っています。一番心がけているのは、皆さんが見ているお客さんだけがお客さんではない、スタッフもお客さんだということです。だからやっぱり謙虚にすることが大切ですし、音響やスタッフの方へのありがとうございますとか、ごめんなさいという言葉がどれだけ大切かを忘れないで欲しいです。人格をしっかり成長させてほしい。これはまだジャグラーとしての弱い部分でもあると思っているので、どんな時でも挨拶を忘れないようにしています。



今後の展望

ア：今後の展望はありますでしょうか。

深：いろんなサーカスのコンテストや国際大会に出たいと思っています。そして日本のジャグラーの、ロードスター、道しるべになるような人間になりたいと思っています。まだまだ分からないことや苦手なこともたくさんありますが、若いジャグラーから質問があったら答える努力をしているので、皆さんもよかったら相談しにきてください。プロになろうという気持ちがあれば絶対なれます。どんな外に行ってください。日本のジャグラーは世界に立えます。

ア：最後に読者の方へ一言お願いします。

深：ジャグリングを、楽しもう！

ア：ありがとうございました。

注1：京都で上演されている、バントマイムやジャグリング、マジック等を組み合わせたノンバーバル（＝言葉に頼らない）シアター。

注2：マルチメディアディアボロアーティスト。

注3：現代サーカスカンパニー「CIRQUEWORK」が2022年に上演したサーカス公演。

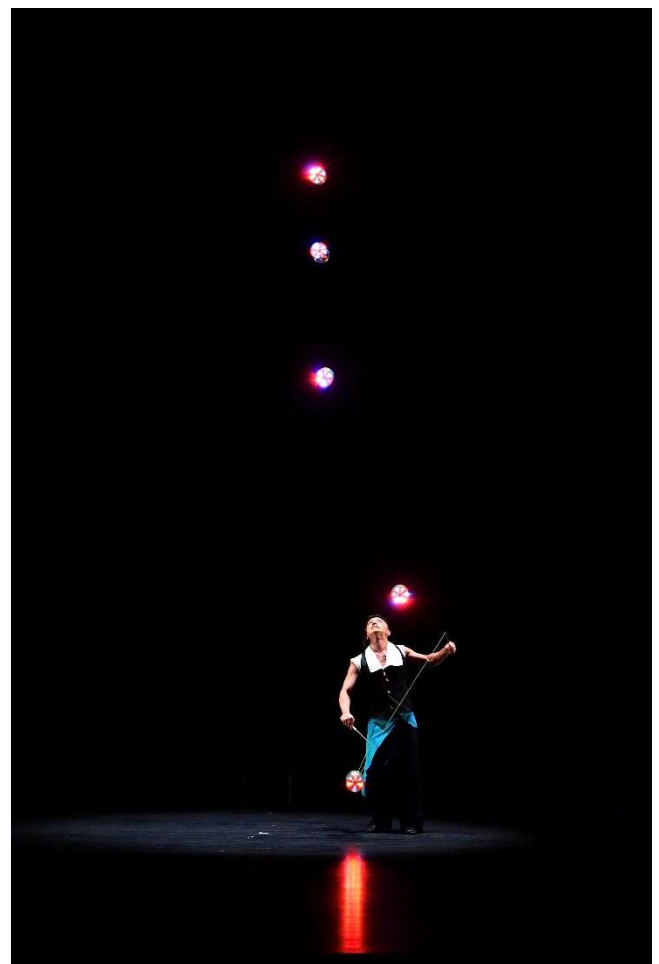
注4：黒龍舞術団が2022年に初演したノンバーバルパフォーマンスショー。

注5：矢田部裕貴。フラワースティック。JJF2024CS 男子個人部門優勝。

注6：舞台後方に備えられた黒一色の幕のこと。

注7：深可晃とジャグラーRenの2人によるディアボロユニット。Radiant（レディアント）としても活動していた（現在お活動休止中）。

注8：パフォーマー・謳歌（Ouka）主宰の、2015年から不定期に開催されているパフォーマンス公演。



ゲストインタビュー3

ジャグリング・ユニット・ フラトレス



<出演者>

江崎 遥、上月 梓矢、那須 真吾、宮田 直人、森屋 純、吉屋 太一

2014年、代表 宮田直人の呼びかけにより、関西で活動するジャグラーを中心に結成。
ジャグリングの道具を舞台美術の主軸とし、言葉や道具の見立てを多用した独自のメソッドで作品を作るジャグリングの舞台公演団体である。
団体名である“フラトレス”は、作曲家アルヴォ・ペルトの室内用アンサンブルの曲『Fratres』に由来しており「室内（＝劇場）にて、ジャグリングを中心とし、他の舞台芸術とのアンサンブルを行う」という活動方針をその名前に込めている。

フラトレスについて

クロ助 (以下、ク)：まずはジャグリング・ユニット・フラトレスの団体紹介と、自己紹介をお願いします。

宮田 (以下、宮)：代表の宮田直人です。フラトレスは、関西で活動しているジャグリングの舞台公演団体です。ジャグリングはいろんなところで披露されると思うんですけど、フラトレスは舞台という環境に絞って公演をやっています。2014年に結成して、10周年の節目にGSへ呼んでいただいて非常に光栄ですし、おめでたい年になったと感じます。メンバーはジャグラーで構成していて、1年〜1年半に1回のペースで本公演をやっています。言葉を使ったジャグリングの公演や、見立てを使った演出が特徴的な団体です。

森屋 (以下、森)：森屋純です。役者とジャグリングの両方をしておりまして、ジャグリングはポイという道具をしています。10年間ずっと在籍しており、数少ない創設団員の1人となりました。よろしくお願いします。

江崎 (以下、江)：江崎遥と申します。私は第2回公演から参加してまして、ジャグリングと役者、発話を担当することが多いです。

那須 (以下、那)：那須真吾といいます。フラトレスで5、6年活動しています。普段は個人でもジャグリング活動をしたり、パフォーマンスアートとか即興表現とか、他のジャンルにジャグリングを持ち込んでいます。

ク：ありがとうございます。本日のGSに出演した残り2名の方も簡単にご紹介をお願いします。

宮：1人が上月梓矢、あずさくんです。ジャグラーで、ボールをメインに扱っています。もう1人が吉屋太一で、ジャグリングに加えて、今回は楽曲の一部を作ってくれて、演目全体をかなり支えてくれました。

ク：フラトレスという団体について簡単にご紹介をお願いします。

宮：活動のメインは本公演で、今年(2024年)の12月に第8回公演を予定しています。公演をやると決めたらメンバーが集まって、稽古や準備を進める活動スタイルを取っています。公演以外の時は、フリーに活動しています。

那：自分は文芸もやっているので、今回は2個目の演目のボールの部分の作詞を担当させていただきました。

宮：フラトレスはジャグリング中心ではありますが、舞台で他の活動もしているメンバーのほうが多く在籍しているイメージですね。

ク：そういった舞台裏の話が聞けるのは、SWJにとってもありがたいことです。

ゲストステージについて

ク：続いて、今回のGSを終えた感想をいただきたいと思います。

宮：僕はGSが終わって、観客の受け取り方はどんな感じだったんだろうって思っていました。カーテンコールですごく温かい拍手をもらったと認識しているんですけども、やっぱり、うちの団体はJJFのGSの中でいうと色物的な立場だと思っています。ジャグリングをする前提にいるけれども、見ている人たちの中にはあまりない概念や飛躍の仕方をしていると思うので、受け取り方は気にはなっ



ています。

でも大会が好きな方とか、パフォーマンスとしてのジャグリングが好きな方とか、ただ練習するだけが好き方とか、公演が好きな方とか、

本当にいろんな方がいらっしゃると思っていて。どれを好きであってもいいし、逆にどれを苦手としてでもいいと僕は思っているんですね。なので、フラトレスが観客全員に刺さってはいないとしても、その中でもしも「自分は実はこんな作品が潜在的に好きだった」と分かってくれた人がいたなら、すごく僕はうれしいです。

森屋 今回、初めてJJFにフルで参加したんですけど、CSの後、本当に頭がきんきんに興奮して眠れなくて、自分たちはこの受け皿にならないといけないのかと思いつつ、そのままGSを迎えたんす。GSが始まる前に他のゲストの皆様と舞台袖で一緒だったんですけど、興奮なのか緊張なのか、震えていたんですよ。CSでも感じたんですけど、こんなに全部投げ出さないとけないの？って思いました。ポイのソロのときに、初めて舞台上で震えてしまって、「あれ？私、震えてる」って気が付いて、舞台に出るのって、見られるのって怖いことだったんだって初めて思ったかもしれません。

なので、GSが終わった後、メイクを落とした後1人で泣いていて、あれが怖いことだったんだって感じる事ができて。普通の演劇のお客さんでも、普通のショーのお客さんでもなくて、一つのことを強く愛好している人たちが、それに対する思いを重ねて見ているので、すごく特殊で特別な舞台だったと感じました。だから、私はまだその震えの正体に名前が付けられてなくて、震えたことに今もめちゃくちゃ衝撃を受け続けています。フラトレスとしても自分としても、すごいターニングポイントになりそうだなって思いました。

宮：僕も、JJFってすごく特別な場っていう感覚なんですよ。というのも、僕はCSの出場を目指していた時期があるし、予選で落ちたことも通ったこともあるんです。でも予選に通ったとき、結果が振るわなくて、ものすごく悔しかった。周りにはずっとCSの出場を目指している同期や、本当に全ての時間をCSに懸けている人たちを見てきたし、自分もそうだったからこそ、その後にあるGSは、なめてかかれない特別なものだと感じていました。

だから、メンバーには稽古のときにJJFとはどういう場なのかという思いをたくさん伝えてきました。これまでJJFに参加したことがないメンバーも多かったんで、その熱量や特別な感覚を抜きに作品を作ってしまうと、痛い目を見るなって思って、そこは強めに言ってきたという認識でした。今の話を聞いて、メンバーも実際に体験してJJFの熱量を感じられたのはすごくよかったと思いました。

那：僕にとっても、JJFは人生で10年以上関わりがあって、自分の中でJJFっていうのは、物語を超えて神話の域に入っているような、そういう概念とか体験だと思っています。10年以上前になりますけど、宮田さんがCSに出場した後に

「JJFどんな感じでした？」みたいなインタビューをしたこともあったりと、JJFに思い入れがあったので、GSの出演依頼が来たのがものすごく衝撃で。連絡が来たときに最初に反応したのは僕で、だいぶテンションが上がっちゃって、それぐらい自分にとってはすごく大きなことでした。一方で、自分にGSへ出演する資格とか能力はあるのかと最後まで悩みました。

宮：僕は安易に「出演したいです」っていう人よりも、出演するか出演しないかを迷っている人のほうが出演させたいって思っていたので、那須くんが一番、信頼できるなと思ったんですよ。JJFで何を目標にしないといけないのかっていう話が一番通じると思ったので。

那：自分でも理解度は一番高いと思っているけど、能力は足りているかすごく不安でした。でも結局、宮田さんが作品づくりをものすごく頑張ってくれて、自分自身でも、特に自分が一番担当したアクトはすごく好きなので、参加できてよかったです。通して見てもううまくできたんじゃないかなと思って、すごく今ほっとしています。

江：私は、普段ジャグリングで人前に出ることよりも、お芝居の舞台に出るほうが多いです。ジャグリングにもずっと関わり続けてはいるんですけど、JJFに参加するのは今年が初めてでした。というのも、JJFって、ジャグリングの技術が

すごい人たちが集まる場所だという認識があって、恐れ多いじゃないですけど、なかなか行こうっていう気持ちになれなくて。初めて参加した JJF が GS の出演っていう、人生で縁がないだろうと思っていた事態が起きて。

GS への出演希望のお話が出たときも、すぐに出演しますとは言えなかったの
で、どんなポジションでもいいから関わらせてもらえたら十分ですみたいな感じで希望を出しました。結果的にはしっかり発話をするポジションで出演して、ほとんどジャグリング道具は触りませんでした。その分、周りの力強い皆さんに頑張っていたいて、私はそんな皆さんを全力で支えようと思って挑みました。

だから、本番は絶対緊張すると思って、覚悟して臨んだんですけど、やってみたら拍子抜けするぐらい楽しくて。完全に純さんと逆パターンですけど、こんなんでいいのかっていうぐらい楽しくて。ジャグリングに人生を懸けて突き詰める人たちがこれを見るんだって思ったのも含めて、楽しさに昇華できた気がして。普段は緊張しやすいんですけど、自分にとってのステップアップになったと思っています。本当に経験したことないぐらいの貴重な舞台でした。

ク：ありがとうございます。実は私は SWJ 編集部と JJF 実行委員長を兼任しておりまして、今回のゲストを依頼させていただいた立場でもありまして。一言だけお伝えさせてもらおうと、フラトレスなら自信を持って GS を任せられると思って打診をし、そして期待以上のパフォーマンスを披露してくれたと感じています。ありがとうございました。

森・江：ありがとうございました。

ク：今回の演技の構成や演出などは、宮田さんが作成されているのでしょうか。

宮：普段は、僕が脚本を書いて、演出、振付もほとんどやっています。一部のソロパートとか、考えてほしいところだけメンバーにお願いするパターンが多いです。ただ今回は、僕自身も何をどうすればいいのイメージが湧き切っていないくて、見切り発車したところがありました。なので、メンバーに助けてもらいながら、全員で作った感じが強いと思っています。特に2個目の演目は、曲を古屋くん、歌詞を那須くんが作って、その2人がクリエイティブなところを担当してくれたので、自分の構成力だけだと、絶対に作り切れなかった作品だと思いました。僕、今後の人生で、GS に自分の単独の力で立てる気はしていません。

江：どうしてですか？

宮：これは冷静に、いろんな観点で自分を客観的に見たときの評価ですね。けど、10年間フラトレスをやり続けて、今回のメンバーだけじゃなくて、今まで関わってくれたメンバー、スタッフとか、いろんな積み重ねがあって、20分のオムニバスという特殊状態の公演を作り切ることができたと思います。

宮：1個目のリングの演目は、もともと僕のソロアクトとして、本公演の『二階建ての家（注1）』という特に見立てを多用した作品と並行的に考えた作品です。マイムをやり始めたり、いろいろ関わることが増えてきた中で、最初に『ザ・マイムアワー vol.10（注2）』という公演で披露したこともあって、ジャグリングの作品だとは思ってるんですけど、マイムの作品だという感じで作ったんですね。それを何年かブラッシュアップしたり、複数人でやったりしてきました。今回、那須くんとかあずさくんと僕と3人で、全員ジャグラーで作るっていう環境ができたので。僕の中でも、なるべくならジャグリング色が強い瞬間があったほうがいいって思っていて。書類を整理する会社でのシーケンスは、3人とも全力でできるようにアレンジしました。もともとブラッシュアップしてきた作品なので、一番安心して披露できました。

ク：『マイムアワー』での初披露は私も現地で見させていただきました。とても素晴らしい作品だと思います。

宮：2個目のボールの演目は、言葉を使うことが団体の特色なのに、それをやらないのは変な話だなと思って。この点においては、フラトレスはジャグリング界の中でかなり研究を重ねてきたと思っていますし、かなり高いレベルにあると自

負しています。この小作品では、それをなるべくコンパクトに、最大限に出すために、まずはずっとしゃべり続けて、リズム読みという、ラップみたいな形で発話をする手法を取りました。他の公演でも取り入れたことがありますけど、なかなかできることではないというか。ジャグリングが、音楽を使うこととの親和性がすごい高いと思っているので、せっかくだしジャグリングの人たちに受け入れやすいやり方でやりたいなって思いました。言葉を使うとなると、みんなストレートに会話劇みたいなものをイメージすることが多いと思うんですけど、この演目は単独で1人がリズムで読む形式になっています。変則的ではあるけれども、あくまでジャグリングが良く見える、ジャグリングに合わせるための言葉としての立ち位置を守りたいと常々思っているんで、うまくできたかなと思っています。

3個目はボイの演目です。最初の演目が、作品の入り口として一番分かりやすかったと思ってるんですね。フラトレスってこういうことをやるんだっていうのも分かるし、具体的に何をやっているのかしっかり理解できると思っています。後半の演目になるにつれて、だんだん分かりづらくなるっていう構成になっています。それは、いきなり3個目を最初にやっちゃうと、シャットアウトする人が現れるだろうなって思って。段階を踏むことによって、3個目も見やすくする、そういう流れをつくりたいなと思っていました。

というのが、僕がよく思っているのは、今回のようなコンテンポラリー的というか、現代劇的な、分かりにくい作品をやっている団体とか人はたくさんいると思ってるんですけど、いきなりそこに行くのってすごく難しいと思うんですよね。そこにたどり着くまでに、踏まなきゃいけない過程があると思っていて、逆に言ったらそれを踏みさえすれば、この難しいアートでもある程度理解してもらえと思っています。ここのステップを飛ばすと、分からないで終わってしまうことも多いと思っていたから。今回はオムニバスにすることによって、皆さんにも触れやすくしたつもりです。

ちなみに今回のGSは『夜、街、一日の終わり』というタイトルを付けました。何となくいろんなことが合わさって、少し自分の想像力が膨らんでいく楽しさを、僕らはやるべきなのかなと思っていたので。難易度の高いジャグリングを見せることによって、技のすごさを楽しませることも大好きだからすごくやりたいけど、それはきっと他の人がやってくれるだろうって、他のゲストへの信頼がすごくあって。僕らはそこに重点を置いてはいけないっていう気はしてたんですよ。僕らが10年間頑張ってきたことって、それじゃないと思ってたから。

ク：作品づくり中のエピソードや、演目でのこだわりについて教えてください。

那：自分は、なかなかジャグリングの案をうまく出せなかったんですけど、作詞は一瞬で書けました。

森：早かったですね。めっちゃ早かった。

宮：びっくりするぐらい。ものの10分ぐらいだった。

江：10分かかってないですね。話を聞きながらスマホで打って。

那：ジャグリングでどれくらい作品へ貢献できるか不安があったんですけど、いろんなジャンルとの融和を目指している段階なので、思わぬところで貢献できてうれしかったです。

江：自分がリズム読みでずっとしゃべり続けるパートは、稽古を見に来たメンバーからも「息継ぎどこでしてる？」って聞かれるぐらい、隙間なくしゃべってる時間が長くて。このパートだけは、そこそこのプレッシャーを感じてましたね。演目のメインがジャグリング



なので、みんなが良く見えるように、私がミスなんかしてる場合じゃないんだって思いながらやっていました。

森：宮田さんは、大体どの道具もできる方なんですけど、ポイはそんなにやっていないので、ポイのパートについては私に扱っていただくことが多いですね。ただ、私が周りの人たちの仕上がりに合わせてシーケンスが変わるタイプで、完成するのが毎回ぎりぎりになってしまうんですね。最後のポイのシーンが、かなりハイアート寄りだったので、私が理解にかなり時間がかかってしまいました。あと、ポイでパスを回したり、紐で遊んだりするパートに関しては、ポイスピナーだとあんまり出てこない発想で、あずさんにアドバイスをもらいながらつくりました。あずさんは全ての演目において、陰ながらジャグリング的な部分をサポートしてくださっていて、あずさんと宮田さん2人のお力で自分のことに集中できました。感謝もしながら、かなり快適な空間で、悩ませていただけたなと思ってますね。

宮：あずさんはジャグリングのアイデアを考えるのが一番うまいと思っていて、既存の動きでどんなものが存在するかを理解した上で、そこからさらに、通常はない動きとか、特徴的に見せられる動きを考えつきます。彼自身が表に出ることは多くないけれど、ジャグリング的な要素を支えた、一番の功労者でした。

森：私の中ではあずさんが一番フラトレスらしい人材だと思ってのですね。勝手にミスター・フラトレスと呼んでいます。

宮：彼がここに来てない理由は、しゃべるのが苦手だからです。

森：いらっしゃったらよろしいのに。

江：本当に。なんで来てないの？

ク：呼んでこようかな。

森：多分、ほほ笑んでくれるだけだと思います。

那：ここにいない分だけ、たたえて。本当に貢献してくれたんで。

森：今回のポジション的に、あずさんや吉屋さん、那須さんのような、演目には出てくけどジャグリング要素のみを受け持つメンバーって、役割上言及されにくかったり評価されにくいんですけど、ジャグリングに重きを置いた集団として、一番いろんなところで宮田さんの右腕的な存在として、最初から最後までずっと支え続けてくれたのがあずさんだと思います。もし今後、フラトレスに興味を持って公演へ来てくださる際には、そこにも注目して欲しいです。

おわりに

ク：フラトレスの今後の展望と読者の方々へのメッセージをお願いします。

宮：これは代表が言う話なのかなって思うんですけど、最終的にこうなりたいみたいなフラトレスの目標がないんですね。

森：10周年なのに。

宮：僕は、いろんなジャグリングが好きなんです。フラトレスみたいなジャグリングは当然好きなんですけど、それ以外のジャグリングも大好きで。これは、例えばWJD in 京都を運営しているときも、別にフラトレスは関わらなくていいなと思い、切り捨てることもあるんですね。フラトレスって、全てをフォローできるような団体ではなくて、あくまでジャグリングの多様性の中の一部だと思ってのんです。だから、その多様性の一部になり続けられたらいいなと思ってます。

舞台公演に限っては、僕が単純に舞台公演も、ジャグリングも好きでっていうのが合わさって、こうなってるわけなんですけども。コロナ禍でジャグリング文化が一度危機的状況に陥ったところからだんだん復活してきて、今年のCS・GSがほぼ満席っていうので、すごくうれしい話だったなと思って。一方でそんな中、舞台公演活動って今はだんだん衰退してきているというか、一回切れちゃったっていう感覚なんですよ。練習会や大会の文化が今やっと再び盛り上がって

きてる段階で、ここからさらに別のことをしたいなっていう人が、ぼつぼつ現れてくるだろうなっていう気がしてます。そうなったときに、舞台公演という選択肢もあると思うんですけど、舞台公演って、めちゃくちゃ労力と専門知識が要るし、簡単に始められないことだと思ってるんですね。少なくとも関西はこういう団体がないので、フラトレスがあることによって、ロールモデルとしてあり続けたり、染谷樹くんが架空カンパニーあしもと（注3）を始めたみたいに、それぞれが発展してって、もっと多様性を生んで、僕らにできないことをいろんな人がやっていける状況になるとうれしいです。なので、目標とは違ってもいいんですけど、長くあり続けること、マイペースに活動し続けることは、これからもやっていきたいですね。

森：私、もともとスタートがミュージカルや演劇で、いわゆる学生時代にジャグリングをしていない人間なので、ジャグリングをやリ込むという感性が、フラトレスに入った頃はあんまりなくて。でも、コロナ禍で、ジャグリングって楽しいんだなと向き合う時間ができて。今回JJFに参加して、ジャグリングに対する憧れがすごく強くなったんですね。JJFはそういう概念みたいな場所だと思ったので、その憧れを、フラトレスであつたりSWJを読んでもらってる皆さんと、形は一緒かどうか分からないけど、追いついていきたいと思いました。

江：初めてJJFに来て空気感に触れて、なにかを一生懸命楽しそうにやってる人たちが好きなんだとしみじみ思ったので。近しい感じで、フラトレスはこういうことをすき好んで楽しくやっているのを見てもらえたらうれしいです。

森：今後もご愛顧よろしくお願いします。

那：僕は、今回のGSで自分の力で成し遂げたことって本当にごく大事なんだけど、すごい小さなものだと思って。自分は何も知らないまま勢いでフラトレスに入ったんですが、入ってみたらこんなに専門知識が必要で、事務的なこと、実務的なことも大量にあって、一つの作品を1年、2年かけて作ってみることが、だいぶ身に染みて。それと同時に、JJFを開くこと、スタッフをまとめること、SWJを編集すること。GS当日もスタッフさんにすごく良くしてもらったので、皆さんにお礼を言いたいです。読者の方々にも。

宮：僕らは舞台公演で言葉や見立てを使ってジャグリングをやっているけれども、ジャグリングは他の要素が反になかったとしても十分に面白いものと思っています。だから、皆さんにもそれぞれ皆さんが思う面白いジャグリングをして欲しいです。自信を持って練習をしたり、大会に出たり、ショーをしたり、趣味程度に楽しむとか、何でもいいと思うんですけど。

僕らだけでは、ジャグリングを広めていとか、楽しさを追求していくとか、研究を重ねていとかは、一部しかできないから。今ジャグリングを楽しんでいる人たちが、本当に自分たちの好きなことを好きなようにやってくれることこそが、ジャグリングを発展させていく一番の方法だと思います。僕らも同じ目線でやっていきたいなと思っているので、今後も、フラトレスに興味を持ったら公演を見にきてほしいし、僕らも皆さんのジャグリングからたくさん刺激を受けて活動にどんどん生かしていきたいと思っているので、みんなでジャグリングを楽しんでいきましょう。

ク：ありがとうございました。

注1：2017年に上演されたフラトレス第3回公演。

注2：いろいろな無言劇・黙劇作品を集めたオムニバスライブ公演で、vol.10は2018年6月24日開催。

注3：ジャグラー・染谷樹が主宰の、「意思はあしもとに宿る、物語はあしもとから始まる」を掲げ、身近にあふれる日用品との関係性の拡張を目指す、オブジェクトシアター・パフォーマンスカンパニー。

ワークショップ一覧



1日目 9月14日

種類	ワークショップ名	講師名
実技	道具と身体の連動、ディアボロ	深河あきら
座談会	ジャグリング道具 自作ブレイクアウト	きそはる
実技	【4ボール】SprungカスケードWorkshop	スズキ
実技	inline3をやってみよう！	響
実技	傘と鞠の曲入門	くろせ
実技	ボーイ初級 初めて〜ファウンテンまで+α	マコ
実技	【シガーボックス】リアルばやしの質問箱	ばやし

2日目 9月15日

種類	ワークショップ名	講師名
座談会	マスターズの集い	西野順二
実技、座談会	筋トレWS	黒珈琲
実技	Re:ゼロから始めるクラブマルチ生活	谷岡健人
実技、座学	今日から始めるベアジャグリング クラブ編	ちょろすけ
実技、座学、座談会	フラワースティック なんでも相談会	よってい
座学	自分のジャグリングを広げるための考え方 入門編	みちすけ
座談会	Women's jugglers meeting in JJF	Jasmine

3日目 9月16日

種類	ワークショップ名	講師名
実技、座学	道具の見立てとムーブ	ジャグリング・ユニット・フラトレス
実技	舞台制作について	ジャグリング・ユニット・フラトレス
実技	Arm traps	Arttu Lahtinen
実技	はじめてのスプリングボーイ	トラヨシ
座談会	「ジャグリングを教える人」のための事例共有会	徳川亮祐 (ジャグリング普及委員会 担当理事)
実技、座学	スリンキーでジャグリングしよう！	タニシドリ
実技	はじめてのトリックロープ	松岡
座談会	どうやったら効率的にジャグリングが上達するか考える会	中村亮介
実技、座学、座談会	ジャグラーカメラ部ブレイクアウト	ジャグるライダー
座学	ルーチンをじっくり見てみよう！	深津哲也・岡田
実技、ブレイクアウト	チーム技ブレイクアウト	ちょろすけ
座談会	EJC2024 in Portugal 報告会	主催：青木 直哉 話し手：青木ほかEJC参加者
座学	SSS 2024 (第22回サイトスワップシンポジウム)	西野順二
実技、座学	バータックス操作向上3	はが
実技	ダボクトでいろんな技をやってみよう	めりー・ネゴ
実技	シガーボックスコンバット団体戦をやろう	松野聖也
実技	チームジャグリング入門～簡単なシークエンスを作ってみる～	かんば from kikyuuiki

Arm traps

Arttu Lahtinen



道具と身体の連動、ディアボロ

深河あきら

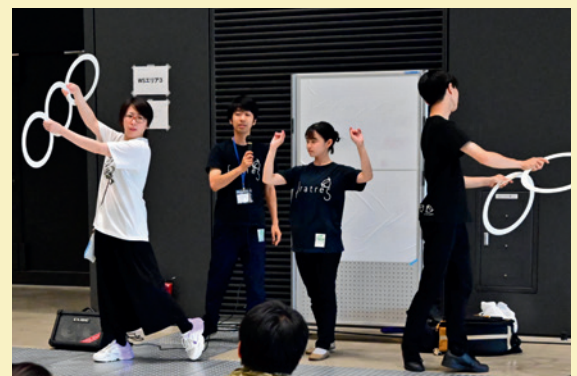


ゲストワークショップ



舞台制作について

ジャグリング・ユニット・フラトレス



道具の見立てとムーブ

ジャグリング・ユニット・フラトレス



イベント紹介1

開催日時：3日目 13:30～14:45
会場：小ホール



出張版ほのぼのの in JJF

アポなしアポカリプス —シニカルでコミカルな終末をあなたと共に—



劇団ほのぼののによるジャグリングのオムニバス公演。技術の高いジャグリングの演技はもちろん、随所にジャグラーならわかるネタが取り入れられたコントパート也大盛り上がりでした。

【出演】utm/サクユ/谷岡海人/ちきぼ/ちょいも/西川歩美/ふじも♪/松永将汰/やまざき/山本孝/わざお
【スタッフ】アスリス/石野耀久/いばたん/大住拓輝/kiyo/高橋惣成/棚橋悠/ぴーたろう/矢口純



劇団ほのぼのの

X(旧Twitter) : @hono_vonoeno
Webサイト : <https://hono-vonoeno.jimdofree.com>

エクストリームジャグリングバトル

トーナメント形式で進行する個人戦のジャグリングバトル。
30秒のムーブ中で次々繰り出される迫力ある技の数々に目が離せませんでした。

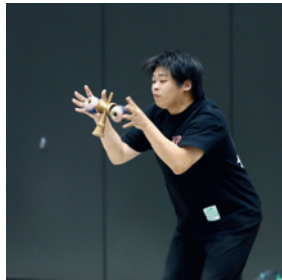


トーナメント結果

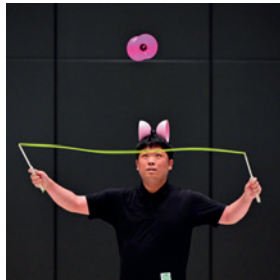
1位：谷岡健人

2位：ヒト

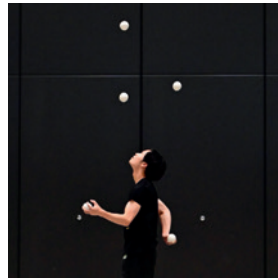
3位：しばた



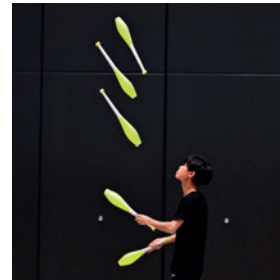
メルト



しんたく



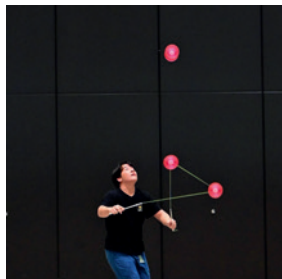
しばた



南孝太郎



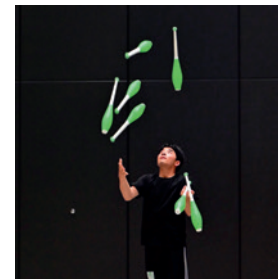
HANE



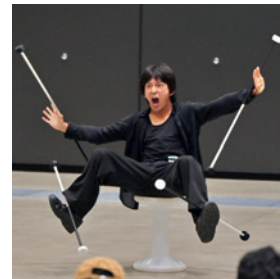
かけとん



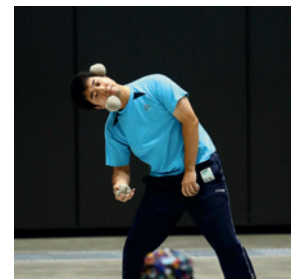
ShotA



谷岡健人



クラタクミ



ひろた



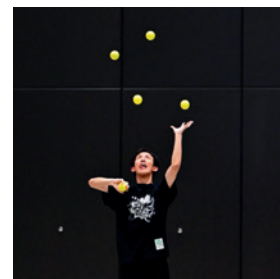
けーすけ



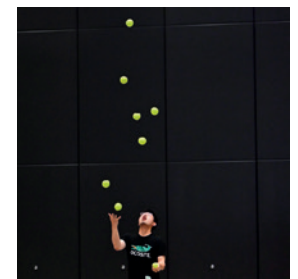
イリエコウシロウ



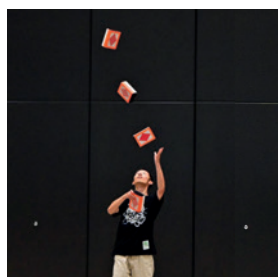
ハムハム



ヒト



NMC



ラクト



【スタッフ・ジャッジ】

司会：世良京太
裏方：ユウ
藤井宗佑
ジャッジ：Bow
矢田部裕貴
高橋優弘

Juggling Carnival -All Generations-

17 くるけん



13 清水朝日



07 ShotA



05 ピルエット26期

04 なるうと



03 森越大渡

02 タニシドリ



01 工藤遼太郎



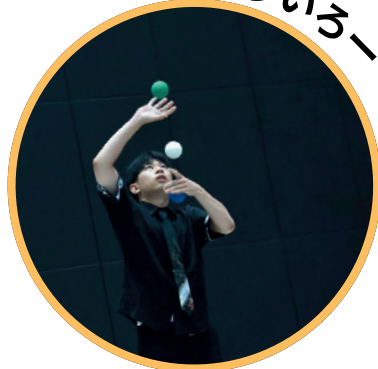
99 イッチー



98 しんた



97 ういろー



00 レイ



94 いっせい



95 土佐清水市最強のリングマン



96 けーすけ



93 ひろた



92 HANE



91 清水公木



90 じゃくたく



”全世代のジャグラー大集合！”をテーマに、90世代(1990年)から17世代(2017年)まで総勢19組のジャグラーが演技を披露しました。

担当：愛知ジャグリング協会



イベント紹介4 4JC Meet-up in JJF

ジャグリングをプレイするだけでなく、様々なテーマに沿ったディスカッションを通して、ジャグリングに対する理解を深めていこうという企画です。

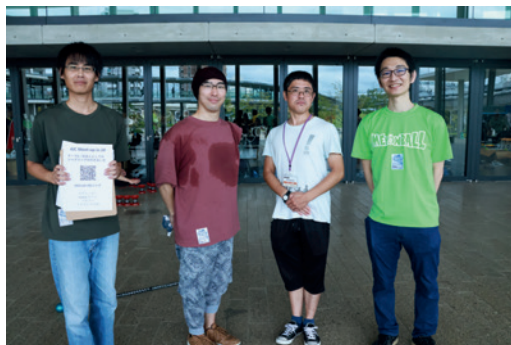
今回は3つのテーマで、SNSのハッシュタグも活用した活発な議論が行われました。

テーマ1：地方からCSへの道

モデレーター：藤村保志花 吉川恭平

パネラー：上田尚弥 曾我梓 松本耀介

ハッシュタグ：#4JCinJJF #地方CS



テーマ2：社会人としてのジャグリングの付き合い方

モデレーター：kanjin やぐら

パネラー：トラヨシ クロ助

ハッシュタグ：#4JCinJJF #社ジャグ

テーマ3：EJCから地方最強イベントを考える

モデレーター：ShotA しおん

パネラー：板津大吾 土居千夏 柴田光之進

ハッシュタグ：#4JCinJJF #EJC地方最強



主催：四国ジャグリングコミュニティ（4JC）

関西パフォーマー協会賞

ジャグリングやパフォーマンスなど普及や発展を通じて関西を盛り上げているNPO法人である関西パフォーマー協会様と連携して『関西パフォーマー協会賞』を設けました。



受賞：しんたく

賞の内容 / 審査基準

JJF2024期間中に最もインパクトの強いトリックや遊び、エピソードを生んだ者を優勝とする。

※審査会などは行わない。審査員が会場内の様子を見て、最も優れていると判断するものを表彰する。

- ・関西パフォーマー協会から委託を受けた者、数名により審査を行う。
- ・審査員の協議により、最も優れていると判断された1名、ないしは1組を表彰する。
- ・本賞の審査では、ジャグリングの技量よりも、アイデア性や面白さ、意外性に重きを置く。

NPO法人関西パフォーマー協会：<https://www.npokpa.com/>

JJF2000のチームチャンピオンが理事長、JJF2001の個人/チームチャンピオンが理事をしているパフォーマーのためのNPO法人です。

主に大阪パフォーマーライセンスの運営や、年に一度KYOTO大道芸祭などを開催していますので、

パフォーマンスに興味がある人はSNSなど覗いてみてください。



エンデュランス

7ボールカスケード	: カイト
5リングカスケード	: Arttu
5クラブカスケード	: カイト
3ポイカスケード (投げ方自由)	: bow
5ボールカスケード	: うず
3リング肩パタ	: どい
7クラブパッシング	: キング牛井と高菜明太マヨ牛井
片手フィッシュテール	: bow
3ボールバッククロス	: かど
3クラブバッククロス	: 南孝太郎
ランナー (道具指定なし)	: ハムハム

4シガーダイヤモンドループ	: TED
DIウィンドミル	: ゴリラ
バータックスのインフィニティ	: 砂原啓人
デュアルプロペラ	: ハムハム、きたかぜ
3シガーレインボーブ	: TED
3フラワーリバーカスケード	: よってい
3皿カスケード	: 花田充
3ディアボロハイトス	: イシバシ
3シガーランナー	: 恭々
インテグラルD	: しみっさん

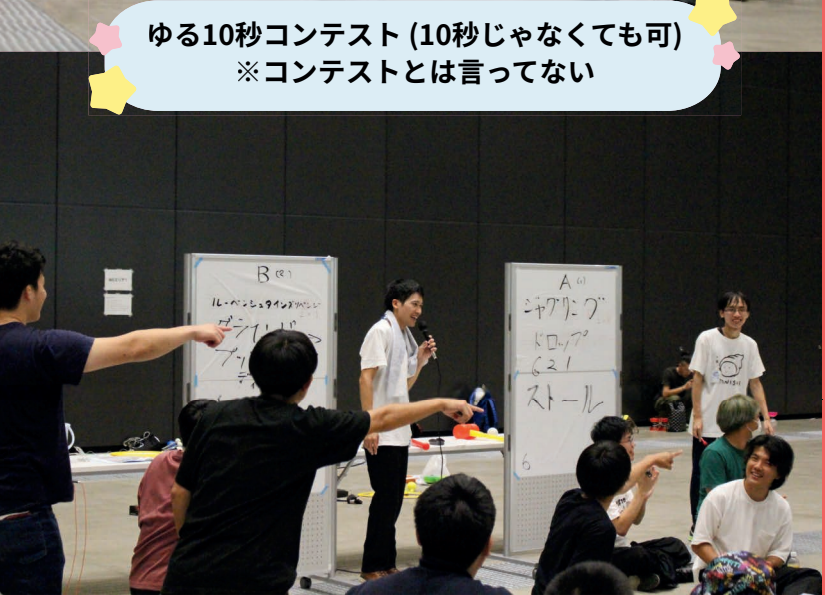
(1位のみ、敬称略)



ゆる10秒コンテスト (10秒じゃなくても可)
※コンテストとは言っていない



1年生交流会・2年生交流会



Shall We Juggle?編集部紹介

SWJ編集部員



まゆこ(編集長)



クロ助



みー



アルジェ

JJF2024当日撮影スタッフ



KMJ



上田一



なっとう



【編集部員募集】

SWJは編集部員を募集しております。

作業内容は企画・原稿依頼と回収・撮影・編集・校正など、ネット中心の活動です。年齢・性別・ジャグリング能力不問です。

ご興味ある方は下記にご連絡をお願いします。

shallwejuggle.edit@gmail.com

編集後記

SWJ第66号をお読みいただきありがとうございます。

自分が編集長として初めて作成する号ということもあり、不安もありましたが、無事に完成することができて安堵しています。

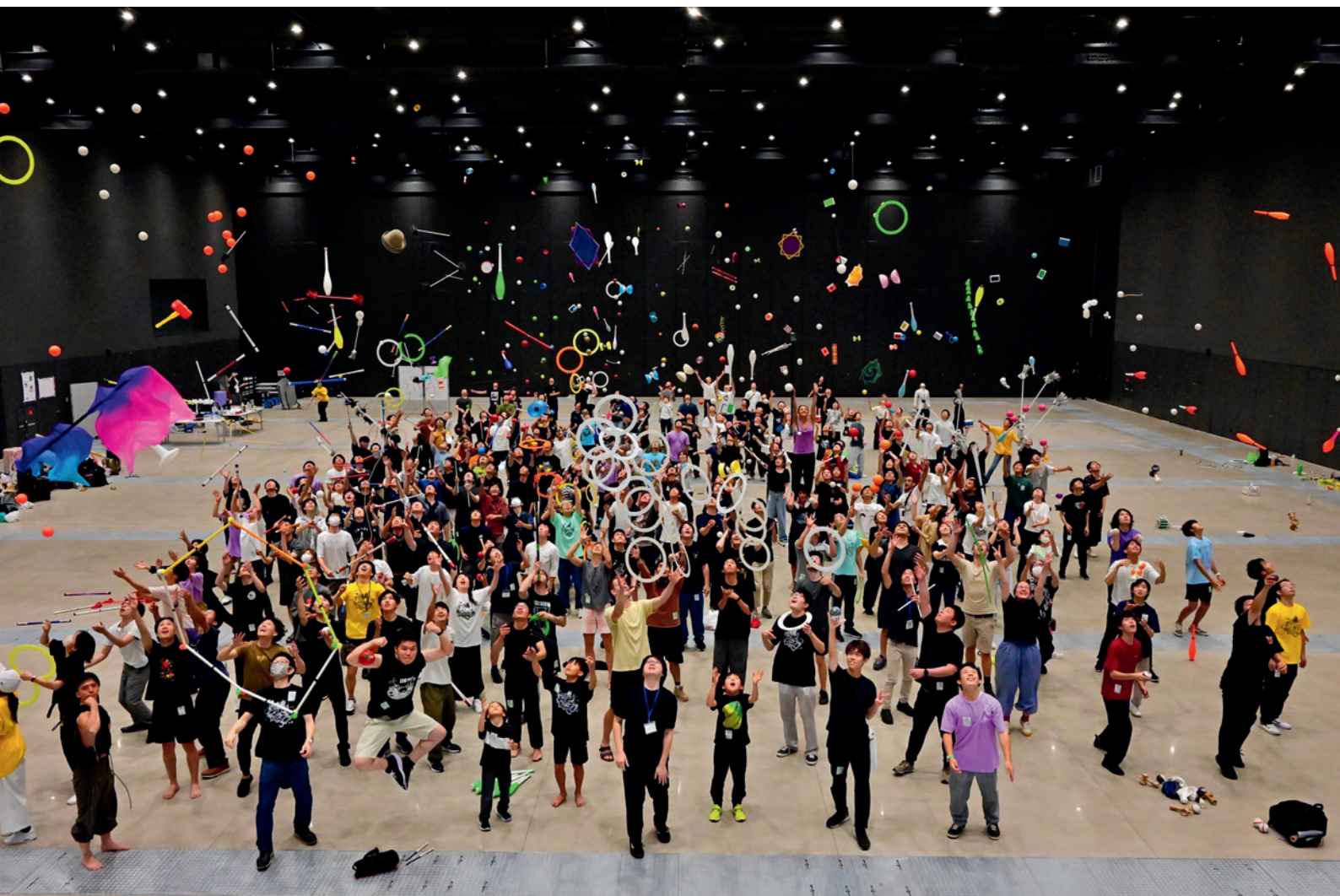
公開まで大変お待たせして申し訳ありませんでしたが、JJF2024に参加した方も、参加できなかった方も、お楽しみいただけましたら幸いです。

また、2025年より編集・校正体制を新たにし、これまでよりも早く誌面を公開できるようになりました。限られた時間の中で、急ピッチで編集作業に当たってくれた編集部員のみなさまや、インタビュー・記事作成に協力してくださった関係者のみなさまには感謝の気持ちでいっぱいです。この場を借りてお礼申し上げます。

JJF2025は長野県・松本での開催ということで、ジャグリングはもちろん、おいしいご飯や温泉も楽しみたいです！

今後ともSWJおよびSWJ編集部をどうぞよろしくお願いいたします！

編集長 まゆこ



JJF2024 実行委員・スタッフ

●実行委員会

実行委員長	クロ助
副実行委員長・CS担当理事	小野口 貴仁
JJF 担当理事	徳川 亮祐
本部チーフ	世良 京太
本部サブチーフ	柏倉 優大
本部スタッフ	熊澤 菜月
劇場チーフ	山下 巧
劇場サブチーフ	齋藤 玲
劇場スタッフ	宮田 直人
劇場スタッフ	高田 晴菜
イベントチーフ	ゆん (尹 泰陽)
イベントサブチーフ	菅沼 千紗
広報チーフ	石須 滉大
Web 担当	尾納 宗仁
海外対応	青木 直哉

●本部グループ

受付	
受付スタッフ	ShotA
受付スタッフ	山口 尚真
受付スタッフ	ゆみてい
受付スタッフ	立石 翼
受付スタッフ	湖東 瞳
受付スタッフ	成澤 瑞希
受付スタッフ	アルジェ
救護班	
救護班メイン担当	古谷 正幸 (まさやん)
救護班サブ担当	藤本 優
救護班	浅井 一樹
救護班	高橋 惣成
救護班	安江 将貴

●劇場 (CS・GS) グループ

CS 事務局	
CS 事務局長	深津 哲也
CS 事務局	山本 翔太
CS 事務局	湖東 瞳
CS 事務局	鈴木 康太
舞台	
舞台監督	竹内 正則
舞台監督補佐	ryodan
CS 司会	福島 千紘
GS 司会	山田 大地

受付スタッフ	まちゃ
受付スタッフ	ゆうま
受付スタッフ	ナベ
受付スタッフ	パス
受付スタッフ	こえづかそうま
受付スタッフ	てんま
受付スタッフ	えびふりヤー
受付スタッフ	大じゃ。!
受付スタッフ	りゅーじ
受付スタッフ	トライ
受付スタッフ	江崎 遥
受付スタッフ	ふじはら

オンライン配信

配信チーフ	岡本 晃樹
配信スタッフ	山田 タカマサ
配信スタッフ	関矢 昌宏
配信スタッフ	松前 健司
同時視聴録配信	三珠 さくまる

●イベントグループ

エクストリームジャグリングバトル司会	世良 京太
エクストリームジャグリングバトル ユウ	
エクストリームジャグリングバトル 藤井 宗佑	
ゆる 10 秒コンテスト(10 秒じゃなくても可)	
※コンテストとは言っていない	ぐるくん
ゆる 10 秒コンテスト(10 秒じゃなくても可)	
※コンテストとは言っていない	タニシドリ
JJF だけじゃない!	
ジャグリングイベントのあれこれ	ゆん (尹 泰陽)
クラブコンバット (FNC)	いしかわ
クラブバレー体験会	いしかわ
エンデュランス司会	八幡 雄士
エンデュランス司会	穴野 恭章
エンデュランス	J
エンデュランス	足羽 鎌也
サイモンセッツ	じゃぐたく
サイモンセッツ	ダイチ
1、2 年生交流会	小川 桂
1、2 年生交流会	ユウ
1、2 年生交流会	まおもち

Juggling Carnival	愛知ジャグリング協会
4JC Meet-up in JJF	松葉川 健一 (やまけん)
出張版まのぼののー in JJF	ちよいも
出張版まのぼののー in JJF	矢口純

●広報グループ

SNS 担当	恭々
デザイン	
ロゴデザイン	へびのあし
SWJ	
SWJ 編集長	まゆこ
SWJ 副編集長	GAO
SWJ 編集部員	アルジェ
SWJ 編集部員	みー
SWJ 編集部員	クロ助
SWJ 撮影班	上田 ー
SWJ 撮影班	なっとう
SWJ 撮影班	KMJ

JJF 紹介動画

撮影・編集	宮沢 健太
-------	-------

月刊 JJF

撮影・編集	金子 真弓
-------	-------

●主催：日本ジャグリング協会

理事長	松岡 寿典
理事	小野口 貴仁
理事	徳川 亮祐
理事	後藤 猛文
監事	小出 博史
事務局長	クロ助
事務局	星野 充宏

JJF 2025 MATSUMOTO

Place

エア・ウォーターアリーナ松本

キッセイ文化ホール

Date

9/13 9/14 9/15

「文化香るアルプスの城下町」
雄大な自然と温泉に囲まれた
ジャグリングの祭典